

【研究ノート】

キッチナーと英領インドにおける軍制改革： 1902－1909 年

和 田 応 樹

1 は じ め に

本稿は、20 世紀初頭の英領インド（インド帝国）において、インド軍総司令官（Commander-in-Chief in India）ホレイショ・ハーバート・キッチナー（Horatio Herbert Kitchener, Earl Kitchener of Khartoum）によって行われた軍制改革を帝国主義(imperialism)時代のイギリスの歴史的文脈のなかで位置づける。その際に、これまで省みられることの少なかった帝国の重要な要素である軍勢力と軍事政策の面から考察したい¹⁾。

インドは多角的貿易決済機構の要として、英帝国にとって非常に重要な「帝国の王冠に嵌め込まれた宝石」であった。しかし、インド総督（Viceroy and Governor-General of India）となるカーゾン（Geroge Nathaniel Curzon）が、「インドを支配している限り、我がイギリスは世界で最強の国家である」²⁾と述べたように、支配自体に価値があり、支配からもたらされるのは経済的価値ばかりではなかった。インドは、植民地財政によって維持される軍勢力を帝国に提

1) この問題を取り上げたものには、小此木真三郎、(1978)「イギリス帝国主義の軍事問題（一八九九～一九一四）」『日本福祉大学研究紀要』第 35 号、1-25 頁があり、インドの軍事問題の重要性についても若干触れられている。しかし、主としてドイツを中心とした対外関係や列強対立のなかでの軍事的要素の影響に関する考察にとどまっている。

2) Mackay, R. F., (1985) *Balfour: Intellectual Statesman*, Oxford: Oxford University Press, p.124.

供し、帝国全体の安全保障や軍事政策を支える存在であった³⁾。

本稿の試みは、インドにおける軍制改革の考察を通して、古典的帝国主義論が有していたにもかかわらず、今では、自明の事実として等閑視してしまった、物理的な力を持つ実体として帝国を論じることである。すなわち、帝国が存立するメカニズムに迫り、どのような力や政策を駆使して、帝国を支配していたのかを探る試みである。これは、帝国を国家として捉えなおし、帝国主義時代の人々が帝国のために努力をはらった、という歴史の真実を見つめなおすことでもある。⁴⁾

そもそも、帝国主義は、19 世紀末に人々が直面した世界分割とそれを巡る国際対立の激化という新しい政治現象を呼ぶのに用いはじめた言葉であった。現在に至る帝国主義研究の共通理解をまとめると、帝国主義は国際的あるいは世界的システムの現象として把握されるべきで、その際には政治・経済・社会など、さまざまな要因の組み合わせ、相互作用の結果として理解する必要がある。しかも、帝国主義を、この言葉が生まれた帝国主義時代に限定することなく、長期的な過程でとらえることである。⁵⁾

しかし、長期的な視野で相対化を志向することは、国民国家が競合するなかで、世界分割が進展・完了した時代の特徴を見えにくくする恐れがある。明らかに、「帝国主義」時代はそれまでとまったく違う時代であり、帝国主義的世界体制が成立した画期性、ヨーロッパの優位、ヨーロッパ流の国民国家の拡大などの歴史的独自性が見られた⁶⁾。帝国主義時代の歴史的本質を探る議論＝帝国主義史は探るべき課題を依然として残している。

3) ホブズンは、「劣等人種」を「文明的な」方式で、安価な外人傭兵に編制することは帝国主義的寄生策で危険なものであり、本国の住民の生命及び財産の防衛が、被征服民族の当てにならない忠節に委ねられたと批判した（傍点筆者）。ホブスン, J. A., (1952)『帝国主義論』下, 岩波書店, 34-35 頁。

4) 大久保桂子, (1997)「ヨーロッパ「軍事革命」論の射程」『思想』第 881 号, 151-171 頁での、近代国家形成と軍事に関する指摘を、帝国を巡る論議に援用した。

5) 木谷勤, (1997)『帝国主義と世界の一体化』山川出版社, 28-29 頁。

6) 前川一郎, (2005)「学界展望 イギリス帝国史研究の挑戦——近代帝国とグローバル・ヒストリー——」『西洋史学』第 220 号, 48-49 頁。

では、どのような視角が帝国主義と帝国を考えるにおいて、有効なのだろうか。第1に帝国を実体的な存在として、具体的には国家とその支配システムとして分析することである。それに関しては、ギャラハーらの非公式帝国論では、公式帝国はやむを得ず帝国に編入された地域として、その契機にばかり研究の関心が集中され、具体的な統治業務の実態にまで踏み込まれていないとの指摘がある⁷⁾。公式帝国下でいかなる統治が行われて、帝国の支配が維持されたのかを考えることは検討されるべき重要な課題である。

第2に、帝国主義時代の独自性をおさえて、それを前提として、帝国主義時代における帝国を、それまでと違う特質をもった存在としてとらえることである。帝国主義時代が、資本主義が高度に発展・制度化された時代であり、植民地競争が激しさを増し、英帝国を筆頭に世界分割が行われたのは明らかであった。そこから、帝国主義時代のイギリスが時代の変化にどのような論理・組織・人材で対応したかを、その時代に即して行われた改革を手掛かりに考える意義が出てくる。

その上で、必要なのは、帝国主義時代を経て、第一次世界大戦⁸⁾に至る歴史の道程をふまえることであろう。帝国イギリスは、国際公共財を世界に提供する覇権国家 (hegemonic state) と定義される一方で⁹⁾、チェンバレン (Joseph A. Chamberlain) が評したように、大きくなりすぎた「疲れた老大国 (The Weary Titan)」でもあった¹⁰⁾。

一般的には、世界的な規模で構築された巨大な建造物である帝国は、その内部において、制度疲労を起こし、本国・植民地の双方で亀裂と腐食が進んでいたとされる。そのために、世界大戦では未曾有の損害を負い、戦後は現状と能力のギャップに苦しみながら、新しい帝国の形を模索することになった。¹¹⁾

7) 今田秀作, (2002) 「19世紀イギリス帝国に関する一考察——経済グローバリゼーションとの関連において——」『経済理論』第309号, 105-106頁。

8) 以下、単に世界大戦 (The Great War) という場合は第一次世界大戦を指すこととする。

9) 秋田茂編, (2004) 『パクス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ書房, 9-10頁。

10) ベイリー, C.A. 編, (1994) 『イギリス帝国歴史地図』東京書籍, 172頁。

11) 木村和男編, (2004) 『世紀転換期のイギリス帝国』ミネルヴァ書房, 2-3頁。

しかし、このような見方からは、戦略的環境の変化を乗り切って、帝国を維持することを成功させ、なおかつ、史上最大の規模の総力戦¹²⁾となった世界大戦になぜイギリスが勝利することができたかが見えてこない¹³⁾。

しかも、戦争や軍隊は社会から乖離した事象や存在ではないということを考えると、問題は軍事上に限ったものではない。帝国主義時代のイギリスを理解するためには、それらを国家や社会と不可分の関係にあるものとして総体的に考察することが必要となる。この点については、筆者は、社会的事象としての戦争や軍隊を歴史のなかで扱う「新しい軍事史」¹⁴⁾が帝国主義史と接合することで、新しい可能性を生むのではないかと考えている。

よって、これまでの議論を踏まえ、本稿が対象とする軍制改革を考察する上で、帝国主義期イギリスの実相を再検討するための論点を3つ提起したい。

第1に、支配の論理構造である。帝国が、どのような論理を用いて支配を正当化し、政策を決定したかということである。具体的には、支配下の現地インド人をどのように軍事力＝インド軍に組織し、帝国のために戦う存在へと組み込んだかを考える。その問題を、本国政府と現地インド政庁間の交渉と妥協¹⁵⁾のなかで展開された、軍制改革を通して分析する。

ここで、インドの軍事力(陸軍)(Army in India)は、本国陸軍(British Army)から派遣されたインド駐屯部隊と、少数のイギリス人将校と現地インド人の志願兵からなるインド軍(Indian Army)で構成されるものである。両者はともに、インド軍総司令官が指揮し、彼はインド総督と、究極的にはインド担当大臣

12) 国家のあらゆる要素が関係し、政治経済構造に大きく制約される戦争の形態。

13) ボンド, B., (2006)『イギリスと第一次世界大戦——歴史論争をめぐる考察——』芙蓉書房で、ボンド(Brian Bond)は、世界大戦がイギリスの軍事史上最大の勝利であり、最終的な勝利の原因を究明することの重要性を鋭く指摘している。

14) 「新しい軍事史」を志向したものとして阪口修平・丸畑宏太編, (2009)『軍隊』ミネルヴァ書房, がある。

15) ガルトウングの「帝国主義の構造理論」を援用して、本国メトロポリタンとアングロ・インディアンとの関係性を「交渉と妥協」としたのが、北原靖明, (2004)『インドから見た大英帝国——キプリングの手がかりに——』昭和堂, である。現地インドの支配層をアングロ・インディアンと一括して定義できるかなど幾つかの疑問点はあるが、本稿でも、軍制改革は本国政府とインド政庁の「交渉と妥協」からうまれたものととらえた。

(Secretary of State for India) に責任を負った。基本的に本国陸軍省 (War Office) は関与しなかったため、軍制改革を巡る交渉はインド担当大臣との間でなされた。¹⁶⁾

第2に、支配の組織構造である。帝国を支配するために、どのような組織が構築されたかということを見る。この点については、植民地インドの研究において、その基礎となる政治制度・統治機構の本格的な研究がないと指摘されるところでもある¹⁷⁾。帝国支配の実相を把握するためには、具体的な装置としての支配組織の解明は不可欠であろう。本稿では、インド支配システムの2部門——文官部門 (civil service) と武官部門 (military service) ——のうち、後者の軍事組織を考察の対象とする。

植民地インドの軍隊に関しては、日本では浜渦哲雄氏や秋田茂氏による先駆的な業績がある¹⁸⁾。浜渦氏は、官僚制と並んで軍隊が支配の柱であり、現地で独自の発展を遂げた特色のある存在であったと記している。一方の、秋田氏は、インド軍の海外派兵問題を主に取り上げながら、インドの軍勢力が帝国の安全保障に果たした役割を論じている。

しかし、浜渦氏の研究は、東インド会社時代で終わっており、帝国主義時代が空白となっている。秋田氏のそれは、安全保障構造の面でイギリスの帝國的な影響力を考察することにあるため、インド軍がいかにして帝国のために使われたかに主眼が置かれ、インド軍自体を考察するものとなっていない¹⁹⁾。

最後に、もう1つの問題意識として、帝国を支えた人材とその活用方法がある。帝国を統治するためにどのような人材が必要とされ、起用されたのか

16) French, D., and B. H. Reid, (2002) *The British General Staff: Reform and Innovation, c. 1890-1939*, London: Frank Cass, p.57.

17) 浜渦哲雄, (1999)『大英帝国インド総督列伝』中央公論新社, 218-220頁.

18) 浜渦哲雄, (2009)『東インド会社——軍隊・官僚・総督——』中央公論新社, ならびに秋田茂, (2003)『イギリス帝国とアジア国際秩序——ヘゲモニー国家から帝國的な構造権力へ——』名古屋大学出版会.

19) 他に、インド人兵士の増員と将校層のインド人化の観点から、第二次世界大戦期を中心に挙げたものに、根無喜一, (1995)『英印軍の終戦——英帝国解体の一側面——』『軍事史学』第31巻第1・2号, 246-262頁がある。インド軍の歴史が小史として記されているが、キッチナーの改革は僅かの記述で、その本質的な内容には触れられていない。

という問題を考えることは支配の全体像を解明するために必要な作業であろう。そこで、本稿で具体的に対象とするのが、インドの政治と軍事のトップである総督ミントー（Gilbert John Murray Elliot, 4th Earl of Minto, 以下、ミントー）と軍総司令官キッチナーである。

インドをはじめとする植民地総督は、あくまで装飾的（ornamental）な役割と責務を背負い、その地位を独占した地主貴族には必ずしも植民地統治に必要な能力は必要なかったとの指摘がある²⁰。強固な官僚制に支えられた植民地支配には、総督が凡庸であっても支障はなかったと。しかし、優れた実務組織が機能するには、指導者のリーダーシップが重要な役割を果たす。よって、ミントーを例に、帝国支配における総督の機能を実証的に明らかにする。あわせて、キッチナーについても、両者がかかわった軍制改革の考察を通して、イギリスのインド支配の人的側面をみる。特に、キッチナーについては、「植民地軍人」という概念から捉えることを目指すが、これについては次章で触れることとしたい。

本稿の構成としては、次章で、本稿の主人公的存在であるキッチナーの先行研究とキャリア特性を押さえ、植民地軍人に関する議論を提起する。続く第3章で、本国陸軍とインドとの関係を考察したのちに、第4章以降で支配の要となったインド軍とその軍制改革について分析する。

なお、本稿で主に使用するのは、The Indian papers of the 4th Earl of Minto である。この文書集はスコットランド貴族第4代ミントー伯爵のインド総督時代の関連文書をまとめたものである。ミントーは、1905年から1910年にかけてインド総督を務めたが、同文書集には彼の前任者カーゾンの施政期間のものも含まれ、両総督時代にまたがる、キッチナーがインド軍総司令官に在任した1902年から1909年までの7年間が、カバーされている。

この文書集については、序文を書いたウィリアム・グールド（William Gould）が、

20) 川村朋貴, (1999)「世紀転換期における植民地総督とイギリス帝国」西川達夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房, 393-399頁。

本国のメトロポリタンと現地インドの政策決定者間の相関関係のなかでどのように統治政策が行われたのか、急激な変化の時代にあって、狡知と矛盾を織り交ぜながら帝国の權威を維持しようとする試みを考える上での絶好の素材を提供してくれると意義付けている。特に、国家が国民を管理し、取り締まる方法の考察は、植民地や帝国の枠を超えて、今日的な意義を持つとしていることは意義深い。民主主義やいかなる政体でも、国家管理（state control）としての支配や統治はついてまわるからであり、本稿でも、肯定的・否定的側面を越えて、あるがままのものとして、支配の実相をとらえるものとしたい。²¹⁾

2 植民地軍人キッチナーと英帝国

2.1 キッチナーの先行研究

陸軍軍人として帝国主義時代を生きたキッチナーは世界大戦に至る時代の動きのなかで、最大級の役割を果たした人物であった。彼は、スーダン再征服とボーア戦争²²⁾で帝国に勝利をもたらし、帝国の英雄となった。一般大衆からの人気は非常に高く、1914年までに勝利の象徴になっていた²³⁾。ゆえに、大戦勃発と同時に陸軍大臣（Secretary of State for War）に任ぜられた。ほかの指導者たちが戦争の本質を見抜けないなかで、彼だけが戦争の長期化——少なくとも3年以上続くであろうこと²⁴⁾——を鋭く洞察し、戦争に勝利するためには巨大陸軍を創設し、イギリスが主導的な役割を果たさなければならないと認識していた²⁵⁾。

21) The Indian papers of the 4th Earl of Minto: Introduction by Dr. William Gould, pp.1-9.

22) この戦争をどのように理解するかによって、戦争の呼称はアングロ・ボーア戦争、ボーア戦争、イギリス・南アフリカ戦争など様々である。本稿では、便宜的にボーア戦争（Boer War）と呼称する。井野瀬久美恵、(2000)「彙報 アングロ・ボーア戦争勃発 100 周年記念国際会議に参加して」『歴史学研究』第 741 号、57-60 頁を参照。

23) Beckett, I., and J. Gooch, (1981) *Politicians and Defence: Studies in the Formulation of British Defence Policy 1845-1970*, Manchester: Manchester University Press, p.88.

24) 貴族院の処女演説でキッチナーはそれを明言している。Hansard, BPP: The War; H.L. Deb. 25 August 1914, vol.17, cc.501-504.

25) Cassar, G. H., (2004) *Kitchener's War: British Strategy from 1914 to 1916*, Washington: Brassey's Inc., p.xv.

しかし、キッチナーほど、名声・評価が劇的に変転した人物もまれであろう²⁶⁾。彼の秘密主義、傲慢な装い、同僚の政治家たちに対する公平・誠実さの欠如は酷評された。彼ら政治家たちは、政治家を信用しない、独善的な彼に不信感を抱き、公式・非公式に彼を非難した。なかでも、大戦を勝利に導いたロイド・ジョージ (David Lloyd George) の回顧録が後世の歴史家に決定的な影響を与えた。率直に言って、キッチナーがロジスティクス (logistics)²⁷⁾ で果たした功績は、それを受け継いだロイド・ジョージの手柄になった。逆に、大戦初期における戦争指導の不手際は、勝利の前に没したキッチナーの責任に帰せられた。²⁸⁾

キッチナーの死後 60 年たった 1970 年ころ²⁹⁾ から、彼に対する再評価の試みがなされていった。ジョージ・カサル (George Cassar) の研究を契機として、デイビッド・フレンチ (David French)、キース・ネイルソン (Keith Neilson) らがキッチナーの戦略や業績を価値あるものとして再評価し、彼に対する非難の不当性を立証していった。³⁰⁾

実際、キッチナーが政治家を信用せず、情報を流さなかったのも、情報漏洩を防ぐためであった。首相も含めて閣僚の多くが周囲に機密情報をおどろくほど自由に伝えていた。彼は「もし彼らがその細君と全員離婚するなら、

26) Neilson, K., (1980) "Kitchener: A Reputation Refurbished?", *Canadian Journal of History*, vol.15, p.207.

27) 日本語では兵站と訳されることが多く、陸上自衛隊でも使用されている。しかし、本来的には後方とすべきとする専門家もいる。なぜなら、兵站とは直接には本国と作戦軍をつなぐ宿駅を意味するからである。Logistics を近代軍事学で定義したジョミニ (Antoine Henri Jomini) は、偵察や情報活動をも含めた戦地の軍の諸活動全般を支えるものであり、参謀が担うべき職務と考えていた。本稿では、敢えて訳さずにロジスティクスと表記する。片岡徹也編、(2009)『軍事の辞典』東京堂出版、238-241 頁。

28) Cassar, (2004) pp.xv-xvi ならびに Keith Neilson が担当した *Oxford Dictionary of National Biography* の Kitchener の項を参照。

29) 1967 年に公文書公開法が改正され、世界大戦に関する記録が全面的に入手できるようになり、1970、80 年代から、世界大戦の研究史の新時代が始まった。ボンド (2006) 59 頁。

30) George Cassar, (1977) *Kitchener: Architect of Victory*, David French, (1986) *British Strategy and War Aims* や Neilson, K., (1980) の研究を指す。本稿では再評価の契機を作った Cassar の研究、とくに最新の研究成果である Cassar, (2004) に大きな影響を受けた。

何でも話すのだが」と語っている³¹⁾。

しかし、日本での研究は、世界大戦に関する研究は豊富であるにもかかわらず、キッチナーに関しては低い評価のままで、近年の研究成果が反映されていない³²⁾。

このような研究動向には、キッチナーのみならず、彼の属した英軍自体の評価が低いものであったことが影響しているように思われる³³⁾。その原因は、特殊な植民地戦争の豊富な経験が近代戦への対応を遅れさせ、さらには英陸軍自体の保守的・反知性主義的体質に置かれる。

けれども、帝国主義時代から世界大戦の勝利の道のりを考えるとき、そのような見方は一面的に過ぎるのではないであろうか。キッチナーの再評価に見られるように、帝国の軍事力を、植民地を視野に入れて総体的に、正しい姿を描き出すことが求められているように思われる。そうしてこそ、帝国主義時代のイギリスの複雑な実相も明らかになる。

実際に、カサールの研究で目を引くのは、植民地経験を否定的に捉えることなくキッチナーの植民地における行政官や軍人としての多様な経験を重視していることである。その豊富な植民地経験が、ほかの指導者にはない幅広い座標軸となる「価値基準」(frame of reference)を彼にもたらし、世界大戦の本質を洞察することができたとカサールは指摘している。³⁴⁾

本稿も、そのような再評価の流れに立ち、帝国を支えた人的側面——植民地軍人の意識と経験——に着目するが、これまでの先行研究は、主として、世界大戦で示された彼の軍事的能力や戦略的構想の解明に力点が置かれてい

31) 見市雅俊、(1984)「アスキスと第一次世界大戦 (1) ——そのヴェネチア・スタンリーへの恋文を中心に——」『経済理論』第197号、28-31頁。資料として使用している恋文には、軍事上の最高機密を含め戦時下のイギリスの最高権力機構の動きが赤裸々に綴られている。

32) たとえば、渡邊吉人、(2007)「第一次世界大戦におけるアスキスの戦争指揮に関する一考察」『政治経済史学』第493号。キッチナーについては断片的な記述にとどまり、しかも、ほかの政治家との軋轢を招いて戦争指揮を混乱させたなど評価は芳しくない。

33) 片岡徹也、(2002)「近代戦に乗り遅れた軍隊——20世紀初頭イギリス陸軍から何を学ぶか——」『陸戦研究』第50号。

34) Cassar, (2004) p.xv.

る³⁵⁾。カサルも陸軍大臣としての彼の戦略とその含意を見いだすことが自身の研究の主題であると述べている³⁶⁾。

しかし、帝国主義からの歴史の流れを経て世界大戦を迎えたイギリスの本質を分析するのに、それで十分であろうか。キッチナーが主導的役割を果たした戦略的構想や戦争指導の基礎には、帝国全体で大戦前の時代に培われた土台があったと見るべきであろう。不十分な点や失敗はあったとはいえ、必要な改革が行われ、軍事力を基礎とした帝国支配の維持に一応は成功していたからこそ、世界大戦の激変に対応できたと考えられる。カサル自身が「(キッチナーによる)全面的なオーバーホールがなければ、あれほどの規模で世界大戦時にインド軍が帝国に貢献することはできなかつただろうと」と述べているのも象徴的である³⁷⁾。

ゆえに、大きなインパクトをもったインド軍改革とそれを行ったキッチナーを取り上げることは、世界大戦へと続く道程として、帝国主義時代のイギリスを考察する上でも重要な意義を持つ。

2.2 植民地軍人と帝国支配の関連性

まず、キッチナーの人物像と時代の特質を押さえるために、キッチナーの生涯を辿りたい。その際、彼のキャリアの特性に着目するが、キャリアのとらえかたとしては、それを展開していく個人——キッチナー——の側から見るか、あるいは、その機会を提供する環境——英帝国という組織体——の側から見るかの2つのアプローチがある³⁸⁾。

前者からは、キッチナーの英帝国陸軍軍人としての生き方が主要な問題となり、彼が自らの人生をいかに生きるのか——生きたのか——という根源的な問いに行き着く。彼が軍人として働く英帝国という環境は、彼自身が選ん

35) Neilson, (1980) pp.207-208.

36) Cassar, (2004) p.xv.

37) *Ibid.*, pp.16-17.

38) 宗方比佐子編, (2002)『キャリア発達の心理学』川島書店, 1-7頁.

だものであり、自分の生き方を実現するための環境であった。このような視点に立つことで、組織のなかで判断を行い、自らのキャリアを切り開いていく主体的な個人像を浮かび上がらせることが可能となる。

一方、環境の視点から見れば、個人は組織が目標を達成するための重要な人的資源であり、教育・訓練・配属などの手段を通じて、その資源を活用・展開しようとする。ここには、組織の人的資源管理と組織の目的・文化が明確に関係してくる。環境に作用されながら、共に歩んでいかざるをえない受動的な個人像も見いだされるが、組織環境あつての個人という視点は非常に重要である。

よって、両者の視点を組み合わせて、キッチナーのキャリア展開を縦軸に、環境・組織としての英帝国を横軸として、彼の生涯に着目する。キャリアは自己形成していくものであるが、環境との相互作用のなかで形成されるものである。環境と時代的要請がなければ、キッチナーはあれほどの名声を生前に勝ち得ることはできなかった。彼は、軍人として最高位の元帥（Field Marshal）に登りつめ、インド軍総司令官、本国の陸軍大臣と枢要な地位を占めたが、このような機会は希少であり、誰しものが獲得できるものではない。ゆえに、組織に選択された人材として、キッチナーの生涯を見通すことは、当時の英帝国の実態と歩みを考えることにつながり、非常に重要な意義を持つ。ミントーも、キッチナーの経歴を語る際に、「初任務以来、帝国の軍事的歴史と歩を同じくする」と述べている³⁹⁾。

さらに、キッチナーに着目するもう1つの重要な意義がある。それは、これまででも触れたように、彼のキャリアが、帝国の使命を背負いつつ、広大な公式・非公式の帝国各地を勤務地として展開されたものであり、当時の英帝国陸軍軍人の典型的な1つのパターンであったからである⁴⁰⁾。彼ら——代表的なところではゴードン（Charles George Gordon）、ウルズリー（Garnet Wolseley）、

39) Speeches by Earl of Minto, Viceroy and Governor General of India, Superintendent Government Printing, India, 1910, p.292.

40) 大英帝国の尖兵、帝国の建設者というにふさわしい一団の種族はコロニアル・タイプと呼ばれた。中西輝政、(2004)『大英帝国衰亡史』PHP研究所、117-118頁。

ロバーツ (Frederick Roberts), フレンチ (John French), ヘイグ (Douglas Haig), そしてキッチナー——は, 世界各地で生じた数々の植民地戦争を戦い抜き, 帝国の建設者として活動した. 本国在住の政治家と違い, 実際に帝国内の植民地に赴き, 時には外交官や行政官の機能も果たしながら, 帝国支配の重要な一端を担った. 彼らの多様な経験は, 彼ら自身のものでもあると共に, 帝国形成の過程と支配の上で重要な役割を果たしたのではないだろうか. よって, 彼らが帝国主義の時代に果たした役割を明らかにするために, そのようなタイプの軍人を「植民地軍人」という概念で定義づけたい.

彼ら「植民地軍人」は, ある地で得た植民地経験を次の赴任地で活かすことのできる間植民地的 (intra-imperial) な「比較する主体」であった⁴¹⁾. 比較するなかで形成された「植民地軍人」の帝国に対する意識や植民地経験が, どのように個々の植民地や帝国全体の統治政策に影響を与えたのかを考え, 探っていくことが本稿以降の目的である. そのため, 各地の植民地戦争に動員され, 植民地に駐屯した兵士も重要な存在であるが, 自らの意識や経験を実際の政策に直接反映させることのできた政策決定者=職業軍人の幹部層を対象とする. その代表例として, 本稿では, キッチナーを取り上げ, 彼のインド軍総司令官時代の軍制改革を考察の対象とする.

2.3 キッチナーのキャリア⁴²⁾

キッチナーは 1850 年 6 月 24 日, アイルランドのリストウエル (Listowel)

41) 比較する主体と歴史学における比較の意義については水谷智, (2009)「『比較する主体』としての植民地帝国——越境する英領インド教育政策批判と東郷實——」『社会科学』第 85 号, 1-29 頁を参照. そこでは,〈比較する〉という行為自体を対象として主題化することで, 安易な類型化では見えてこない支配の論理と実践の存在を示し, 比較の重要性を提起している. しかしながら, 比較するという行為の結果, 実際の植民地政策にどのように反映されたのかを考察しなければ, 比較がもたらす複雑な相互作用も見えてこないように思われる.

42) Speeches by Earl of Minto, Viceroy and Governor General of India, Superintendent Government Printing, India, 1910, pp.293-294 から, 晩餐会での経歴紹介を軸にしながら, *Oxford Dictionary of National Biography* の Kitchener の項と Cassar, (2004) pp.1-18 を参照した. ほかは注に加えた. キッチナーの伝記は, 没後の 1916 年から刊行されている. なかでも Sir, Arther, G., (1920) *Life of Lord Kitchener*, The Macmillan Company は 3 巻からなる重厚な伝記である.

近郊の Gunsborough Villa に生まれた。父親ヘンリー⁴³⁾は退役陸軍中佐で、じゃがいも飢饉 (Great Potato Famine) 後の 1849 年秋にアイルランドに移住してきた地主であった。キッチナーはアイルランド生まれのイングランド人であり、彼と同様に軍人として名を馳せたウルズリーやロバーツも同様であった。彼らアングロ・アイリッシュ・ジェントリ (Anglo-Irish gentry) はプロイセンのユンカー的存在であり、身を立てるに十分な資産を有していなかった彼らは、質実剛健な気質からも軍人を志すことが多く、強い上昇志向を有していた⁴⁴⁾。

キッチナーも、軍人を志し、1868 年 2 月にウリッジ (Woolwich) の王立陸軍アカデミー (Royal Military Academy)⁴⁵⁾ に入学した。1871 年に卒業し、工兵士官として晴れて英国陸軍工兵隊 (Royal Engineers) の一員となった。

1870 年から 1880 年までの 10 年間にはヨーロッパで大きな軍事上の出来事が 2 つあった。1 つは、普仏戦争 (Franco-Prussian War) で、ドイツ軍の勝利は各国に軍制の再考を促す大きな影響を与えた⁴⁶⁾。特に注目されたのは、のちにインド軍や本国英陸軍の改革の主眼となる参謀本部 (General Staff) のシステムであった。ただし、キッチナー自身は参謀将校 (staff officer) の教育を受けることはなく、体系的な戦争学 (the science of war) も学ばなかった⁴⁷⁾。キッチナーは生涯を通じて実践派の軍人であり、現場での体験を重視し、自らの「価値基準」は経験から構成した。若き士官候補生キッチナーは普仏戦争に自ら志願して従軍し、初の実戦を経験した。フランス軍に身を置いた彼は、統制のとれていない軍がドイツ軍に敗北する様を目の当たりにすること

43) ヘンリー・ホレイショ・キッチナー (Henry Horatio Kitchener) もインド勤務を大反乱前に経験している。

44) Barnett, C., (1970) *Britain and Her Army, 1500-1970: A Military Political and Social Survey*, New York: William Morrow & Company, pp.314-315.

45) 1740 年 4 月 30 日にジョージ 2 世の勅令状によって設立された砲兵・工兵士官養成のための軍事専門学校。学習科目は、数学を筆頭に測量術、フィールドワークなど高度に専門的であった。王立委員会の報告書では、その教育は高く評価されている。村岡健次, (1996) 「イギリス陸軍士官の教育」『甲南大学紀要 文学編』第 102 号, 1-24 頁。

46) French, D., and B. H. Reid, (2002) *The British General Staff: Reform and Innovation, c.1890-1939*, London: Frank Cass, p.1.

47) Cassar, (2004) p.1.

になった。

数年後、キッチナー中尉はパレスチナ調査団 (Palestine Exploration Fund) のメンバーとして測量業務に従事するが、そのさなかに 2 つ目の露土戦争 (Russo-Turkish War) が起こり、困難な状況のなかで業務を遂行することになった。帝国の威令も届かない遠隔地での任務は、彼の指導力を磨き上げ、部族民との交渉を通じて外交にも開眼し、行政官のスキルも身につけた。スーダン沿岸部の知事 (Governor-General of Eastern Sudan and the Red Sea Littoral) も経験し、着実に海外で勤務を重ねていった。その過程で、現地の習俗並びにアラビア語の習得に努め、知る人ぞ知る中東通として知られるようになった。

概して、成功を取めた植民地軍人は現地文化と言語の習得に励み、それを軍務などの勤務に活かしていたようである。特に、現地人からなる部隊を指揮する際は、彼らの価値観にも配慮し、心をつかむことが重要であった。

キッチナーの名を大きく知らしめ、彼のキャリアを切り開くことになったのは、アフリカにおける一連の功績であった。1892 年 4 月、3 年半のエジプト勤務を経て、エジプト軍のシルダール (sirdar of the Egyptian Army, エジプト軍総司令官) となった 41 歳のキッチナーは、全精力を傾けて、エジプト軍の改革・近代化を推進した。すべてはスーダン再征服という大事業を成功させて、イギリスの威名を回復させるためであった。入念な 4 年間の戦争準備ののち、本国政府は 1896 年にスーダン再征服の許可を与えた。この過程で、彼は完璧主義者かつ仕事中毒ぶりを発揮し、過去の経験からも他者に委任することをせず、すべてを自分の手の内で処理した。

工兵出身で測量とインテリジェンス (intelligence)⁴⁸⁾ を重視するキッチナーは、慎重かつ緻密に作戦を進めた。交通連絡線・兵站線の確保のため、産業革命の産物である鉄道輸送を大規模に戦争に導入した。その意味で、厳しい地形と気候のなかで、補給と輸送の体制を築き上げた彼は、工業化時代の戦

48) 「判断・行動するために必要な知識」と定義され、インフォメーションとは明確に区別される。北岡元、(2006)『インテリジェンスの歴史』慶応義塾大学出版会、11-17 頁。

争を行いうる軍人であった⁴⁹⁾。鉄道の敷設は軍隊の前進に併せて行われ、困難に直面した現場には自ら赴いた。助言や督励だけでなく、ときには袖を捲り上げて、ピックやシャベルを振るった。この遠征に従軍したチャーチル（Winston Churchill）は「部族民との戦いは主として輸送の問題であった」と評した。

多大の戦費を必要とする作戦は財政的制約のため、たびたび停止させられたが、そのたびにキッチナーは、エジプトや本国に帰還して、直接交渉して解決した。ついに、25,000人の部隊は1898年8月末首都オムドゥルマーン（Omdurman）に到達し、敵軍を打ち破った。暑い砂漠を1,500マイルも越えてスーダンに近代的装備を持つ軍隊が到達できたことは、まさにロジステクスと組織力の勝利であった。キッチナーは帝国の英雄、「勝利の組織者」として迎えられた⁵⁰⁾。

キッチナーは再征服後、初代のスーダン総督を1899年1月19日から12月18日まで努め、初期統治政策の先鞭をつけたが⁵¹⁾、僅か1年足らずで、彼を必要とする帝国の緊急事態が出現した。

英帝国はボーア戦争で開戦から連続して敗北を重ねた。英軍はボーア軍に油断し、準備不足のまま戦闘に突入した。しかし、ボーア軍は屈強な農兵かつ狙撃の名手で構成され、近代兵器で武装しており、小規模な植民地戦争とは異なる様相をみせた。その危機は、帝国民に帝国意識を喚起し、帝国を構成する自治領諸国からは多数の義勇兵がかけつける事態となった（第1表参照）。

49) Urban, M., (2006) *Generals: Ten British Commanders who Shaped the World*, London: Faber and Faber, p.203.

50) 前首相ローズベリー（5th Earl of Rosebery）は饗宴でキッチナーの勝利を称え、祖国の危機を救ったことを感謝した。Crewe, R. O. A. Crewe-Milnes, Marquis of, (1931) *Lord Rosebery*, London: Murray, p.556.

51) 栗田禎子, (2001)『近代スーダンにおける体制変動と民族形成』大月書店, 164-175頁においてキッチナーの統治期も描かれている。イギリスは、近代的輸送手段により地理的に統一され、一定の近代的教育を受けた官僚機構に支えられた中央集権国家を建設しようとした。これには、現地スーダン社会の協力も必要で、スーダン社会の側も状況の変化に積極的に対応しつつ、大きく変動した。

第 1 表 ボーア戦争に投入された帝国の軍勢力

ボーア戦争動員数		(単位：人)
南アフリカ駐留守備隊		9,940
本国からの増援	正規軍	228,171
	正規軍以外	109,048
インドからの増援		18,534
自治領からの増援		30,328
現地召集兵		52,414
総計		448,435

(資料出所) 秋田茂, (2003)『イギリス帝国とアジア国際秩序——ヘゲモニー国家から帝國的な構造権力へ——』名古屋大学出版会, 77 頁の表から作成.

その結果、英軍は文字通り帝国の軍隊となり、ボーア戦争は帝国総がかりの戦争となった。人材面でも帝国は威信をかけて、2 人の卓越した軍人を送った。総司令官ロバーツとその参謀長キッチナーは 1900 年 1 月 10 日ケープタウン (Cape Town) に到着した。気質はまったく違ったが、よいコンビで、相互の信頼のもとに一致して難局に当たった。彼らの交流は戦争後も続いた。キッチナーの第 1 の任務は、ロバーツの作戦のために必要な輸送・補給体制の再構築であった。

ロバーツは圧倒的な兵力でボーア軍を掃討し続け、11 月末までに、ボーアの 2 共和国は占領された。敵残党の掃討作戦を除いて、まもなく戦争は終わるだろうと思われ、ロバーツはキッチナーにあとの指揮を託して本国へ帰還した。

しかし、戦争終結は程遠く、戦争の真の局面はここからであった。ボーア軍はゲリラ戦術に移行し、交通連絡・補給戦を襲撃して回った。ボーア側は戦争の長期化により、イギリスに厭戦気分を蔓延させ、心理的打撃を与えることを狙った。また、諸外国の介入を期待した。現に、イギリスは外交的に孤立し、諸外国からの非難を浴びていた⁵²⁾。総司令官キッチナーの帝国の平和、

52) 中西輝政 (2004) 172-174 頁。

そして戦争を和平で終結させるための戦いがはじまった。

彼はスーダンの部族民相手の戦いとはまったく違う戦争の新形態に戸惑った。しかし、知識や経験に限界はあったけれども、キッチナーという名の戦闘機械は問題の諸側面を慎重に分析して、効果的かつ恐ろしい戦術を編み出した⁵³⁾。彼は、ゲリラ部隊を元から断つため、焦土戦術を徹底した。農場を燃やし、穀物を破壊し、食糧の備蓄品を強奪した。

この過程で、生活できなくなった非戦闘員の居住者——ほとんどが女性と子供——は、集中収容所（concentration camp）に収容した。急造で間に合わせた収容所は数が足りず、過密状態で極めて不衛生で、26,000 人もの人々が疫病で亡くなった。

次第に、ボーア軍は打撃を受け、抗戦意欲を喪失していった。キッチナーは和平による戦争終結を望み、その機会をうかがった。彼は和平交渉において重要な役割を果たした。ボーアの自尊心を尊重し、寛大な条件を提示した。強硬派の意見を抑え、高等弁務官ミルナー（Alfred Milner）ら政治家たちの復讐的な和平を望む声と戦った。その結果、1902 年 5 月 31 日に講和が成立し、キッチナーは調印後に「これで我々はよき友人だ」と述べて、帝国を苦しめた戦争は終結した⁵⁴⁾。

帝国は総勢 35,000 人余りのボーア軍に対し、50 万人近い大軍を投入した。その衝撃は大きく、世紀転換期の諸改革を喚起した。それだけに、勝利をもたらしたキッチナーは国家の英雄として迎えられた。スーダンで勝ち得た勝利の組織者としての名声は昇華し、彼は勝利の象徴、代名詞になった。一方、専断的なスタイルは益々際立ったが、彼は最高指揮権を決して他者に委任しなかった。しかし、部下の不平に応えるため、司令部を出て、現場から把握するように努力した。あくまで、自らのスタイルを貫いた。

こうして、キッチナーは、インドに赴任するまでの 30 年近い歳月を海外で

53) Urban, (2006) pp.198-199.

54) Pollock, J., (2001) *Kitchener: Architect of Victory, Artisan of Peace*, New York: Carroll & Graft Publishers, Inc., pp.223-224.

過ごし、海外の勤務地や植民地戦争で豊富な知識と経験を培った。同時に見えてくるのは、キッチナーが時代と帝国に必要とされ、彼の方もその機会を見事にとらえ、キャリアを展開させていったことである。後期ヴィクトリア朝陸軍は、改革と職業軍人の専門化が進むなかで、特権的将校クラブの風潮も残していたが、精力、才幹、帝國的使命感を有した少数の有能な将校たちには帝国は身を立てるに相応しい場を提供したのであった⁵⁵⁾。

変化を必要とする場所に相応しい、適材適所の人材としてキッチナーはインドに赴任する⁵⁶⁾。

3 英帝国の軍事力——本国とインドにおける陸軍改革の関連性——

1902 年インドに赴任するため、離別の挨拶に訪れたキッチナーに対し、かつての上司ロバーツは「インドでなすべきことは山ほどもある。彼の地における陸軍の全組織は、近代戦に適合するためにオーバーホールが必要である」と言い送った。そして、ため息混じりに「ここ本国における陸軍も同様である」と付け加えた。⁵⁷⁾

ここに、ボア戦争を経験した 2 人の植民地軍人ロバーツとキッチナーは、本国とインドにおいて、それぞれが陸軍の総司令官として、改革に取り組むことになった。このように、インドにおける軍制改革は、本国における英陸軍の改革と同時代的に並行して、かつそれと密接な関わりを持ちながら、なされていったものであった。ゆえに、インド軍の改革問題は、インド支配ならびに英帝国というより高次で幅広い問題と深く関係した。

むしろ、帝国全体に視野を広げて、その広がりの中かで考察しなければ、改革の本質を理解することはできない。本国とインドにおける改革とを結び

55) Bond, B., (1961) "The Late Victorian Army", *History Today*, vol.XI, p.624.

56) インド軍総司令官は通常インド経験のある人物が就任することが多かったが、のちに対応することになるカーゾンが、キッチナーの名声と能力を強く望んだという背景もあった。Pollock, J., (2001) p.184.

57) Young P., and J. P. Lawford (ed.), (1970) *History of The British Army*; London: Arthur Barker Limited, p.205.

つけて、相互作用のなかでどのように両者の改革がなされたのか、というテーマは帝国主義と帝国の支配体制を考察する上でもっと議論されなければならないものであろう。よって、本章では、インド軍改革を考察する上での前提として、さらには今後の研究課題を考える上での新しい視角として、本国とインドの関連性に着目しながら、当該期の英陸軍について触れたいと思う。

さて、キッチナーが軍人となった1870年代前半は、第一次グラッドストーン（William Gladstone）内閣の陸軍大臣カードウェル（Edward Cardwell）の下で、大規模な陸軍改革が進められた時期であった⁵⁸⁾。それは、後期ヴィクトリア期、エドワード期と続く長い一連の改革の時代であった。カードウェル改革の眼目は、雑多な陸軍行政を陸軍大臣の下に集約し、強い権限を持つ陸軍大臣の下で機能的で一元的な組織を実現することにあった。王族のケンブリッジ公（Duke of Cambridge）をはじめとする反対派の抵抗にあいながら、ともかく改革は実現された。⁵⁹⁾

また、海外勤務の見直し、植民地からの撤兵、短期兵役制度の導入など、兵員募集環境の改善と兵力確保を目的とした改革も実行された。この時期の陸軍は、イギリス特有の志願兵制度に基づく陸軍と厳しい財政制約という条件下で、帝国防衛における責務の増大に対応していかなければならなかった。絶え間ない小規模植民地戦争への対応、新兵器・技術の変化、海外派兵に対応した組織編制など要求される課題は多かった。主として、英陸軍は、勇気や意思などの個人的資質、よく訓練・統制された部隊、文民の優れたリーダーシップといったソフト面のマンパワーに支えられていた。⁶⁰⁾

しかし、時代の趨勢はより大きく動いていた。時代の特徴は、軍隊のプロフェッショナル（専門職業）化と一般兵役制による大規模軍隊の整備にあった。

58) カードウェル改革については、根無喜一、(1992)「カードウェル改革と英国陸軍情報部の成立」『人文論究』第42巻第1号、145-158頁がある。根無氏は、バクス・ブリタニカの時代から世界大戦期まで、英国陸軍の改革と近代化について一連の興味深い論考を多数発表されている。

59) Bond, B., (1961) pp.617-619

60) Spires, E., (1994) "The Late Victory of the British Army," *The Oxford Illustrated History of the British Army*, pp.189-190.

明らかに、普仏戦争で示されたプロイセン流のシステム——徴兵制度、戦略的鉄道網、動員技術、特に参謀本部——が目指すべき理想像とされた⁶¹⁾。しかし、イギリスではプロイセン・モデルはそのまま受け入れられず、プロフェッショナル化の指標となる参謀組織が完備されるのは、他国と比べても遅い、20 世紀に入ってからのものであった⁶²⁾。

ただし、遅すぎたイギリスの改革においても、カードウェル改革では、陸軍将校職の売官制度廃止を実現し、プロフェッショナル化の先鞭をつけていた。そのように、ゆっくりとではあるけれども着実に、専門性と組織的効率を高める方向に動いていたからこそ、参謀本部創設を含めた 20 世紀初頭の近代陸軍への脱皮はなされえたのであった⁶³⁾。

このようなイギリス流の改革の歩みからは、改革派と守旧派の相克のなかで、時間はかけながらも、一面では妥協ともいえるような、合意形成のプロセスがうかがえる。また、ボーア戦争や数々の植民地戦争で失敗を繰り返しながらも学ぶ姿からは、失敗を教訓とし、実践を重視する実践主義の根強さも感じられる。裏を返せば、学びと改革のプロセスの連続こそが、帝国の支配を支えていた根源であり、経験を重視する人材活用もイギリス流の叡智ととらえることも可能であるように思われる。

また、当時最新のシステムである参謀制度の導入に関しても、他国が一斉に模倣するなかで、イギリスが独自の路線を辿ったことは、帝国主義時代の軍事的思考や組織の「比較する」行為の対象として興味深いものである。ドイツとの国際的競争が激しくなるなかで、イギリスが最先端（とみなされた）ドイツの軍事システム——とりわけモルトケ（Helmuth von Moltke）の参謀本部システム——の実像をどのようにとらえ、イギリスのシステムと比較しながら

61) ハワード、マイケル、(2010)『改訂版 ヨーロッパ史における戦争』中央公論新社、166 頁。

62) この問題に関しては、中村好寿、(1982)「イギリス陸軍におけるプロフェッショナルリズムの形成過程」『軍事史学』第 18 巻第 3 号、2-16 頁を参照。しかし、本稿はイギリスの歩みを単なる「遅れ」とはみなさない点で異なる。

63) 根無喜一、(1995)「E・スパイアーズ論文に見る 1880-90 年代の英国陸軍改革」『人文論究』第 45 巻第 1 号、47 頁。

ら、どのように導入したかは、当時の思想も絡む問題として今後の考察の対象としたい⁶⁴⁾。

軍隊に頭脳中枢を持たせる試みが成功する一方で、プロイセン軍の強さの基盤と考えられた一般兵役制は導入されなかった。ロバーツはこの運動の中心となり、成年男子に軍事訓練を課すという控えめな内容でキャンペーンを行った。それでも、徴兵制がイギリス的でないという全階級に広く行き渡った反感は根強かった。チェンバレンの関税改革キャンペーンと同様に、ロバーツも労働者階級に対して次のように訴えた。⁶⁵⁾

「適切な軍事組織を持たなければ、われわれは帝国を失い、われわれの力は失われてしまう」「イギリス国民は帝国とそれに付随する商業的富を放棄するか、あるいは帝国の防衛に備えるかのいずれかである」。⁶⁶⁾

ロバーツは「民主主義国家においては、労働者階級が支配階級なのであり、さらにまた、イギリスおよび帝国の利益は彼らの利益なのである」と社会帝国主義的な言説まで用いて、市民の「戦争における任務」を問いかけた⁶⁷⁾。しかし、結局、イギリスが一般兵役制を採用するのは、世界大戦でキッチナーが大規模な志願兵軍隊を創出したのちの1916年1月のことであった。

すなわち、ボーア戦争や世界大戦の危機時には大規模な志願兵を集めることに成功したイギリスでも、強制的に市民に兵役を課すシステムは相容れず、容易に受け入れられるものではなかった。この問題を考えることから、2つの点が導き出される。1つは、カードウェル改革で、兵員確保のために短期兵役制を導入したように、一般的に兵士の社会的地位が低かったことである。

1866年において、兵卒の日給は1シリング1ペンスで、そこからさらに糧

64) この問題については、ロバーツなどとも交流があり、モルトケの思想をイギリスに紹介したイギリスの近代軍事学の祖スペンサー・ウィルキンソン（Spenser Wilkinson）を軸にして考察したいと考えている。

65) センメル、バーナード、(1982)『社会帝国主義史』みすず書房、236-241頁。

66) 同上書、241頁。

67) 同上書、242頁。

食などのための控除が9ペンス半弱あったため、実際には3.5ペンスしかなかった。1892年には手取りが9.5ペンスに改善された。1890年代のイギリスの農業労働者は週に13シリングから15シリングを稼いでいた。商人や熟練工が入隊するメリットはなく、身体健全な若者を入隊へと導くのは悩みの種であった。イギリス兵士の着るレッド・コートが社会的な不名誉とされる風潮が、装備、組織などの面で漸進的改革が進む後期ヴィクトリア朝期にも存在したのである。⁶⁸⁾

次に、英陸軍の任務は主として、治安維持と帝国の建設であったが⁶⁹⁾、必然的にイギリス人兵士に海外勤務はつきものであった。植民地戦争への動員に植民地防衛のための駐屯、海外勤務が長いことが兵士入隊の支障になっていると考え、陸軍大臣カードウェルは海外勤務期間の見直しを改革に取り入れた。

このことを先のロバーツの一般兵役制に関する言説と組み合わせて考えると、帝国の利益は彼らの利益とならず、そもそも彼らにとって防衛すべき帝国とは何であったのかということが問題として出てくる。ボーア戦争の危機時には、愛国的ジンゴイズムが高揚したが、一般兵役制の問題と絡めて考えると、帝国国民にとっての帝国とは何であったという問題に新しい側面が出てくるように思われる。例えば、徴兵された一般兵士が、自らの故国（本国）と直接関係のない地域での戦争に投入されたとき、それを正当化できる支配論理を帝国は持つことができたのかということである。それを持たなかった、もしくは失敗したがゆえに英帝国の軍事力は、志願兵制に基づく本国陸軍とインド軍に頼らざるを得なかった⁷⁰⁾。無論、これは仮説の域を出ず、帝国主義期イギリス支配の実相を軍隊の面から考える上での今後の課題である。そ

68) Bond, B., (1961) pp.622-624.

69) *Ibid.*, p.616.

70) インド軍についても、海外派兵の論理的根拠と国制との関係を巡っては、議会で大きな論争が繰り広げられたが、正当な合法的行為として承認された。これについては、秋田茂（2003）が19世紀末の海外派遣問題を詳細に論じている。

れは、一般兵役制に基づく常備軍がなかった帝国イギリスがどのような国民国家であったかを考えることにもつながるであろう。

また、ロバーツとキッチナーは、ボーア戦争後も交流を続け、両者は書簡を交わしている。ロバーツはキッチナーに対し、本国の改革に対する守旧派の抵抗を嘆き⁷¹⁾、キッチナーの方は、改革構想を練るために有意義な視察旅行をすることをできたと書き送っている⁷²⁾。本国とインドでの改革で、両者がどのような意見交換をもったのかも、今後の研究課題として考えなければならない問題であると考えている。それは帝国軍人、なかでも植民地軍人の人的交流や人間関係、それによって彼らの行動や思考がどのように影響を受けて、帝国の支配にも関係してくる問題でもある。

このように軍隊を取り上げることで、英帝国を考えるための刺激的なテーマが導き出されるが、最終的には、ボーア戦争の経験と戦後の改革を糧として、陸軍の専門性と機能は高められ、改革が実施された。ロバーツを最後に陸軍総司令官の職は廃止され、1904年2月4日には初代の参謀総長（Chief of the General Staff）⁷³⁾が任命された。1906年には参謀制度も名実共に形を整え、長い年月はかかったが、戦争の備えるためのシステムが整備された⁷⁴⁾。時を同じくして、インドでは、キッチナーが大規模な改革を実施していた。

4 帝国のインド支配と軍事政策

4.1 インド軍小史

戦争と社会というテーマのもとに、ヨーロッパ社会全体を概観したなかでマイケル・ハワード（Michael Howard）は、第二次世界大戦後のインド独立により、帝国に地球的軍勢力の地位を与えていたインド（陸）軍をイギリスは放棄する

71) 本国の改革を巡る騎兵の論争については根無喜一、(1990)「エドワード時代のイギリス騎兵——アンゲルシ侯爵の研究を中心に——」『人文論究』第40巻第1号、16-32頁。

72) Sir, Arther, G., (1920) ii, p.129.

73) 1908年4月2日以降は Chief of the Imperial General Staff と呼称。

74) French, D., and B. H. Reid, (2002) p.25.

第 2 表 大反乱以前から世界大戦期に至る英領インドにおける兵力の変遷

年	Strength of the European army in India 在印英軍兵力	Strength of the Native army in India インド軍兵力	人口 (人)	面積 (平方マイル)
1856	45,104	235,221	—	—
1860	92,866	213,002	—	—
1869	64,858	120,000	238,831,000	1,450,744
1886	73,582	134,492	287,223,000	1,560,160
1908	75,702	148,996	294,361,000	1,773,168
1914	76,953	159,134	—	—

(資料出所) 1856-1908年: East India (Army and Population) Return to an Address of the Honourable The House of Commons, dated 4 May 1908, p.1.

1914年: Jack, G.M., (2006) "The Indian Army on the Western Front, 1914-1915: A Portrait of Collaboration," *War in History*, vol.13, No.3, pp.332-333.

ことになったと象徴的に述べた。⁷⁵⁾

では、このように、イギリスのインド支配に重要な位置を占めた軍勢力は統治政策のなかでどのように形成されたのであろうか。

まず、インド軍は、東インド会社の傭兵部隊を起源とする。1740年代に東インド会社は、現地人をインド人傭兵 (Sepoy) として採用しはじめ、本国の政策にも影響を受けながら、征服事業を進めた。1856年時点で、現地インド人兵力は 235,221 人に達し、一方のヨーロッパ人兵力は 45,104 人であった (第 2 表参照)⁷⁶⁾。

しかし、1857年に起きたインド大反乱 (Indian Mutiny) がイギリスのインド支配における転換点となり、統治政策に大打撃を与えた。インドは本国政府

75) ハワード、マイケル (2010) 216-222 頁。ハワードは、新たな戦争研究の創始者として、イギリスにおいて戦争研究を 1 つの学問領域として確立した。彼は伝統的な軍事史研究を厳しく批判し、戦争と社会は相互に規定し合うものであり、戦争全体を大きな社会的文脈の下で捉えるべきことを提唱した。

76) 1909 [Cd.4956] Memorandum on Some of the Results of Indian Administration during the Past Fifty Years of British Rule in India, p.33 では、インド軍は 40,000 人のヨーロッパ人兵士と 215,000 人の現地人兵士から構成され、他に 32,000 人が駐屯していたと記されている。数字の異同はあるが、現地人兵士が多数を占めていたことがわかる。

による直接統治に移され、インド担当大臣が議会に対して責任を負うこととなった⁷⁷⁾。当時の総督カニング（Charles Canning）率いるインド政庁は、危機に瀕したインド支配の再構築に取り組み、とくに国内の治安維持体制の再建を重視した⁷⁸⁾。

統治の再編成の結果、基本的には、大反乱以降の 50 年間は、アフガン戦争などの軍事行動はあったものの、全体として、国内の治安は保たれ、インド支配は安定した。インド政庁の直接の関心は、王冠の下でのインドの改善と進歩にあり、概して、この時代は、内政重視の時代と言えた。⁷⁹⁾

統治安定の柱として、インド人部隊の再編成を中心とする大規模な軍制改革が行われた。反乱前に 235,000 人に達した総兵力は 140,000 人に削減された。一方で、イギリス人将兵は反乱前の 45,000 人から、65,000 人に増加した。すなわち、インド兵の反乱に備えるため、部隊における英印比率が決定的に変更——おおむね 1 対 2——された。総兵力に占めるイギリス人の割合は反乱前には 16%であったが、反乱後は 31%と約 2 倍になった。

また、大反乱後は、グルカ、シクといった忠誠心に厚く、戦いを名誉とする部族——尚武の民（*marshal race*）——からの募集に方針を変更した。変更は反乱防止とインド軍の質向上に寄与し、帝国が期待するインド軍の形成に寄与した。

1879 年に陸軍委員会（Army Commission）がインドの軍事政策を 3 つに定義した。3 つとは、外的勢力の侵入からの防衛、国内の反乱の鎮圧、藩王国軍隊の監視で、明らかに国内の治安維持がインド軍の主任務であった。しかし、19 世紀の最後の 20 年間に変化が訪れ、国境に関わる軍事問題が次第に重要

77) この時期を本国側から考察したのが秋田茂、(1983 年 9 月)『『自由貿易帝国主義時代』のインド支配——チャールズ・ウッド卿のインド統治政策をめぐって——』『史学研究』第 161 号。インド相ウッド（Charles Wood）卿は統治の安定とインド財政の均衡回復をもっとも重視し、現地擁護のパターナルな統治姿勢を示した。

78) 秋田茂 (2003) 35 頁。

79) 1909 [Cd.4956] Memorandum on Some of the Results of Indian Administration during the Past Fifty Years of British Rule in India, p.1.

性を増した。ロシアが中央アジアに進出して以降、ロシアの脅威が現実問題となった。外部に対する防衛体制の構築に関心が注がれ、インド防衛の役割が増した。⁸⁰⁾

国内の治安維持を目的に編成・配置されていた軍隊は、ロシアというヨーロッパの近代的軍隊と対峙しなければならない可能性に直面することになった。軍の組織と制度を改める仕事をはじめられた。その結果、1895年に3管区の軍隊は統一され⁸¹⁾、インド政庁の統一指揮下に置かれた。また、鉄道と道路の整備が進められ、軍隊を展開する能力を高めた。⁸²⁾

一方で、インド軍は緊急展開部隊としての活用が次第になされていった。1878年5月、約9,900名余りのインド軍が地中海の英領マルタに派遣され⁸³⁾、続いて1882年エジプト、1885年スーダンと帝国にとって深刻な問題が生じた地域へインド軍が派遣された。両地域には、軍事的干渉を正当化できるようなインドの利害が含まれておらず、帝国の権益の問題であった。帝国イギリスにとって、インド軍抜きでの国際秩序と、公式帝国の拡張・維持は考えられなくなっていた⁸⁴⁾。これは、インド軍は大英帝国の軍隊としての性格を帯びていく過程であり、インド軍は帝国防衛の問題と深く関係する存在となった⁸⁵⁾。

各国の軍備増強と軍事的進歩は、インド政庁にも軍隊の効率化と兵力増強の課題をつきつけた。しかし、支配政策の妙とインド軍の役割が有効に機能し、インド国内では、部隊の軍事的必要性は低下した。藩王国にも適度な部隊を派遣するのみでよかった。実際、8,000万人の人口を擁する2つのベンガ

80) Summary of the administration of Lord Curzon of Kedleston, Viceroy and Governor-General of India in the Military Department, 1907, p.3.

81) それまではベンガル、ボンベイ、マドラスの3つの管区軍 (Presidency Army) に分割されていたが、単一の軍隊に統一された。

82) *Ibid.*, p.9. このときのインド軍総司令官がロバーツであった。

83) 秋田茂 (2003) 39-43 頁。首相ディズレイリ (B. Disraeli) は、この派遣がイギリスの地位を維持するための行動であり、帝国防衛に必要なものであったと主張した。

84) 同上書、56-63 頁。

85) 同上書、35-39 頁。

ル⁸⁶⁾には僅か 9,700 人の部隊が駐屯しているのみであった。国内の治安安定が、外部に目を向けさせる余裕を生んだとも言えた。けれども、大反乱以降、1895 年にインド軍が統一された改革に続いて大きな改革が、時代の変化に対応してなされることになる。それは、第 1 に、インド軍を管轄する陸軍局 (Army Department) とインド軍総司令官の機能と権力を高めるために組織とシステムを再構築すること、第 2 に、インド軍に参謀本部 (General Staff) 制度を導入して、参謀将校により効率的に軍を機能させることを目的とした改革であった。⁸⁷⁾

4.2 帝国の認識

ここでは、軍制改革の実態に入る前に、当時のイギリスのインド支配と軍事政策について、最高位の政策決定者たちがどのように認識し、改革を実施したのかをある晩餐会での祝辞から迫ってみたい⁸⁸⁾。

1909 年 8 月 20 日、インド政府の夏の都シムラ (Simla) のユナイテッド・サービス・クラブ (United Service Club)⁸⁹⁾で離任するインド軍総司令官キッチナーのための晩餐会が開かれた。すなわち、この晩餐会は、インドでの任務を終えて、旅立つキッチナーを慰労するために開かれたものであった。晩餐会には軍関係者をはじめとする 160 名以上の招待客が参集した。乾杯に際して、インド総督ミントーは、簡にして要を得た、心からのスピーチを行い、その歴戦かつ高名な武人 (War Lord) を称えた。⁹⁰⁾

86) この報告がまとめられた 1909 年時は、カーゾンによりベンガルは東西に分割されていた。

87) 1909 [Cd. 4956] Memorandum on Some of the Results of Indian Administration during the Past Fifty Years of British Rule in India, pp.33-34

88) 晩餐会という席上での表現である以上、ある程度的美辞麗句的表現は含まれるであろう。しかし、無から有は作り出せず、その表現から事実裏打ちされた言葉を見いだし、なによりも、同時代人が言葉に込めた思考を汲みだすことは可能である。菅原篤、(1993)「19 世紀末イギリス帝国政策省察」『立正大学人文科学研究年報』第 30 号、25-16 頁では、同様に王立植民地協会の年次晩餐会におけるチェンバレンの祝辞から、帝国の代表的政策立案者の帝国構想に迫っている。

89) 同クラブは、インド高等文官試験合格者のみをメンバーとして、本国を真似て造りだされたシムラの社交界における最初のクラブであった。北原靖明 (2004) 116-121 頁。キッチナーの離任晩餐会は、同クラブの歴史において、はじめて総督が主催したものであった。

90) Speeches by Earl of Minto, Viceroy and Governor General of India, Superintendent Government Printing, India, 1910, p.290

名前の判明している出席者は 161 名⁹¹⁾で、軍人はキッチナーに次ぐ高位の中将 (Lieutenant-General) 3 名を筆頭に将官級が 15 名、佐官級 47 名、尉官級 38 名の計 100 名が参加している。1891 年の Census of India によるとインド駐在の将校は約 5000 名であったが⁹²⁾、1910 年時の総司令部幕僚・参謀将校の定員は 119 名であるので、会の趣旨から考えても、キッチナーに近く接した層が出席していると思われる。一方、軍人以外の出席者は医者や牧師を含め 61 名で、半数以上は軍関係者が占めていたが、文官関係者も多い会であった。

さて、キッチナーは返礼のスピーチで、まず「我々はこの国 (インド) に、食べ物にするためにやってきた通りすがりの単なる鳥たちではない」「純粋に心からこの国とここに住む人々を愛している」ことを強調して述べたあと、インド総督の貢献に感謝の言葉を述べて、締めくくった。具体的には、今やダフ (Beauchamp Duff⁹³⁾) 将軍、総司令部幕僚や参謀将校の手によって遂行されている目的への感謝であった。その結果、インドに平時と戦時両方の備えが構築され、帝国の軍事力のなかでもっとも効率的な組織としてインド軍を残して、キッチナーはインドの地を去ろうとしているのであった。⁹⁴⁾

インドへの言葉に、文明化の責務に対するゆるぎない自信や支配の正当化の論理とだけ見ることは簡単である。しかしながら、恒久的ではないにしても、インドを統治するものにとって、一瞬の利益だけを目的とするのではなく、国の明日のことを考える姿勢や思考は必要であった。

実際にキッチナーは、自身がインドで実行した原則の 1 つに、将来を見据えて行動することを挙げた。単に現在の要求に応えるのではなく、国の将来

91) 管見の限りではほぼ全員がイギリス人ないしヨーロッパ人で、T. Hirata 並びに S. P. Sinha なる姓名が例外として目を引く。

92) Beuttner, E., (2005) *Empire Families Britons and Late Imperial India*, Oxford University Press, pp.7-8.

93) ダフは軍務総監 (Adjutant General)、初代参謀長 (Chief of Staff) を歴任し、キッチナーの改革を支え、世界大戦期にはインド軍総司令官となる。キッチナーは、自身の周囲に有能な腹心の部下を組織した。そのなかには世界大戦で活躍する将軍も含まれる。

94) Speeches by Earl of Minto, Viceroy and Governor General of India, Superintendent Government Printing, India, 1910, pp.290-291.

を考えて、その基礎固めをすることが万事において重要であるとした。これは、彼の改革を考察するにあたっても重要な点であり、なぜあのような大規模な改革をインドに導入し、インドの軍事力を強化したのかを考える手掛かりとなる。キッチナーは、イギリスのインド支配について、多忙な業務に埋没して、目先のことにとらわれ、常に先のことを見据えられていないことを弱点の1つと指摘して、晩餐会のスピーチで敢えて苦言を呈した。⁹⁵⁾

次に、より個別にスピーチの内容を見て、キッチナーが主導した軍制改革の特性を追ってみたい。

ミントーは、キッチナーの経歴を紹介したのち、「(インドにおける7年近い)日々は重要な軍制上の改革と結び付けられる。(中略)インド軍のような軍の再編や近代戦へのさらなる備えは、専門的見地だけでなく、軍事的思考や伝統との衝突なしで実行できるとは誰も思わない。しかし、今夜ここにいるすべての将兵諸君が同意するように、キッチナー卿は、(中略)陸軍の高等行政を確かに機能的なものとしただけでなく、離任に際して、インドがいまだかつて保有しなかった、現地インドのより訓練され、よりよい装備をもち、よりよい手当てを受けた部隊を残した」⁹⁶⁾と述べた。

ここでは、キッチナーのインド軍総司令官時代に、インドでかつてない規模の——軍事組織、訓練、装備、待遇など広範囲にわたる——軍制改革が行われたこと、キッチナーの在任期間はその改革に集約され、彼が困難な課題に取り組み、多くの反対にもかかわらず、実現させたことが見いだされる。

続けて、ミントーは「キッチナー卿の軍事上の功績のみではない。(中略)我が同僚たちは、すばらしい軍総司令官だけでなく、先見性をもち、鋭敏な政治家 (statesman) を失ってしまうとの声を漏らしている。副王は、困難に満ちた時代において、忠誠心厚い支えを失ってしまうのだろう」と語っている。⁹⁷⁾

95) *Ibid.*, p.298.

96) *Ibid.*, pp.294-295.

97) *Ibid.*, p.295.

キッチナーの政治家としての有能さは議論を呼ぶものであるが、インド軍総司令官の役割が軍事上にとどまるものではなく、インド統治にかかわった姿がここからは浮かび上がる。のちに見るように、キッチナーの行った改革がインド支配に深くかかわるものであったからだけでなく、インド軍の役割自体がそうであった。帝国の支配において、軍事政策は統治の根幹をなすものであり、機能的な軍隊としてのインド軍の維持は単なる軍事上の問題ではなく、重要な統治政策上の問題でもあった。

ミントーのスピーチに対して、キッチナーは「(すべての国にとって、祝福の最大のものである) 平和は戦争への備えによってのみ賈われる。(中略) 私がインドで指揮権をもったときの環境は、大きな変革が避けられないものであることを示していた。直前に終結した南アフリカにおける戦争は、帝国全体の軍事的資源を試すものであった。それは、我々に、軍事的効率性を得るための新たな目標、防衛のための帝国統合と帝國的組織という新しい理念を託していった。本国同様に、インドにおいて、単に陸軍だけでなく、国家や政府が、我々の有する軍事的資産がオーバーホールされなければならない時代が来ており、時代に即して近代化されなければならないことを自覚したのである。(傍点筆者)」⁹⁸⁾

すなわち、インド軍の改革問題は、帝国総がかりの戦争となり、その苦戦から帝国に問題をつきつけることになったボーア戦争を直接の契機として行われたものであった。この戦争には、ミントーとキッチナーはともに、それぞれの立場で深くかかわっている。

ミントーは戦争当時カナダ総督 (Governor General of Canada) であり、南アフリカへの兵力派遣を渋るカナダ自治領政府と難しい交渉を重ねた。カナダへの直接的な脅威が存在しない「帝国の戦い」への参加をめぐっては、賛成派のイギリス系、反対派のフランス系住民の世論も巻き込んで大きな論争となった。ミントーは帝国の意向を体現する総督として、戦争がもたらした緊張と

98) *Ibid.*, pp.296-297.

重圧のなかで、あらゆる手段を尽くして、カナダ人兵士の戦場投入を実現させた⁹⁹⁾。しかしながら、帝国の長女や従順なる娘と評されたカナダにおいても、帝国に対する貢献を引き出すことと危機にあって帝国内を連合させることの難しさをミントーに痛感させるものであった。¹⁰⁰⁾

一方のキッチナーは、現地で帝国の問題を目の当たりにし、帝国の軍事的資源が危険な状態にあることを痛感した。その思いが、帝国を防衛するためには、帝国の軍事的統合性を高め、帝国としての組織力を発揮できるものにすべき新しい時代が来ているとの言葉になって表れた。その中核に、自身が指揮権をとるインド軍のオーバーホールが位置した。

帝国外部の観察者として、インドに駐在していた日本帝国陸軍の駐在武官東乙彦少佐が、「今や印度ハ数十年来ノ編制ヲ維持スルノ時ニアラサルヲ覺リ大改革ヲ行ハント欲スルニ至レリ」と情勢を分析したように、インド軍の改革は時代の要請であった¹⁰¹⁾。

こうして、キッチナーは1902年から1909年までの約7年間をかけて、インドの軍制改革に取り組む。それは、カーゾン総督の後半期とミントー総督のほぼ全期間に相当する。

実は、「頑強かつ不撓の帝国主義者¹⁰²⁾」と称されたほどのカーゾンがインド総督を辞任し、ミントーに交替するに至ったのは、軍制改革を巡り、キッ

99) *Ibid.*, p.5. 1905年10月30日にロンドンで開かれたミントーの送別晩餐会において、ポートランド公(Duke of Portland)は、この話題を取り上げ、カナダ総督時代における功績として称えている。戦争終結から3年を経た当時において、帝国の指導者層にとっては、記憶にとどめられる問題であったことがうかがえる。また、この宴席は非公式でプライベートなものであったが、外相(Secretary of State for Foreign Affairs)ランズダウン(5th Marquess of Lansdowne)、ロバートツラの彼と縁の深い人物や、インド相ブロードリック(J. F. Brodrick)などが参加しており、ミントーの人脈や指導者層のつながりがうかがえる。

100) この問題についてはミントーの公刊書類から分析を行った細川道久、(1993)「イギリス帝国政策とカナダの対応——カナダのボーア戦争参加をめぐる——」『西洋史学』第170号、70-86頁を参照。

101) 吉村道男、(2004)「史料紹介日露戦争期における英領インド駐在陸軍武官報告」『外交史料館報』第18号、29頁。

102) 矢内原忠雄、(1937)『帝国主義下の印度』大同書院、210-211頁。カーゾンははじめてインド産業の資本主義的発達に対し、商工局を創設するなど積極的助長政策をとった。

チナーと対立したためであった。カーズンは、本国政府の支持も失い、彼に代わって、ミントーが、キッチナーの改革を支援するという明確な意図のもとに、本国政府によって送り込まれた¹⁰³⁾。軍制改革のインパクトは、総督の交代をもたらすほど大きく、帝国全体にとって非常に重要な問題であった。

5 インド軍制改革前期——改革の構想とカーズンとの対立——

キッチナーによる改革の領域は多岐にわたる総合的なもので、相互に関連しているが、中心にすえるのは、参謀制度を軸とする軍の組織改革である。なぜなら、参謀制度はボーア戦争の教訓——ボーア戦争時のイギリスには参謀本部がなく、そのために情報の分析や現地指揮官への命令を下すこともできず、戦争全般にかかわる統一的な作戦計画を立てることもできなかった¹⁰⁴⁾——をもとに本国とインドの両方において、時を同じくして整備が進められた制度であり、近代戦を遂行する軍隊になくてはならないものとして改革の要であったからである。そこからは、最新の軍事思想が植民地に導入された興味深いテーマも伺うことができる。

イギリスの参謀制度を扱ったブライアン・ボンダなどの研究においても、インドにおける興味深いテーマは看過されるか、少ししか注意を払われていなかった。そのような状況に対し、ティモシー・モーマン(Timothy Moreman)が、1910年4月に結実するインド参謀本部の創設にいたるキッチナーの改革を最新の研究¹⁰⁵⁾で取り上げた。モーマンは、新設されたインド参謀本部の働きにより、世界大戦に対応できるような備えがなされたとこの改革の画期性を強調する。¹⁰⁶⁾

しかし、モーマンの研究は軍事史的にはハイレベルの研究ではあるものの、

103) Roberts, P. E., (1980) *History of British India: under the company and the crown*, Delhi: Oxford University Press, p.559.

104) 佐藤栄一編, (1979)『政治と軍事——その比較史的研究——』日本国際問題研究所, 83頁.

105) Moreman, T., "Lord Kitchener, the General Staff and the Army in India, 1902-1914", French, D., and B. H. Reid, (2002) pp.57-74.

106) *Ibid.*, p.57.

逆にその枠内にとどまってしまう限界がある。インド支配と軍事政策の関連性、インド政庁、なかでもインド総督の役割、本国とインド政庁間の交渉と妥協、そのなかで見えてくる両者の相違などより広い視野のなかでとらえなければ、帝国主義というこの時代に植民地インドで行われた軍制改革の実像は見えてこないであろう。本稿は、それらの点に留意しながら、キッチナーと彼による軍制改革を、出発点として、全体像を追っていくものである。キッチナーは、軍制改革を、戦争に即応する体制を築き、軍を効率化するために絶対に必要なものと考えていた。カーゾンも、帝国の要望に応えるためには、軍の強化と効率化が必要であるという点では同じ認識であった¹⁰⁷⁾。しかし、両者は、改革の範囲と規模の点で大きく相違していた。

1902年11月28日にキッチナーはインド軍総司令官に就任した。これまでに培った彼の「価値基準」から考えると、インド軍は軍隊としては非常に粗末な状況であった。彼は赴任直後の1902年12月に「実戦能力に深く憂慮している。もし我が軍隊が戦場に召喚されるような事態が起これば、それは災厄をもたらすであろう」と吐露している¹⁰⁸⁾。

イギリスのアキレス腱であるが、効率的な帝国防衛体制における要と認識していたインドのために大規模な仕事に彼はとりかかった¹⁰⁹⁾。彼はインドの将来について様々な思考を巡らしたが、その根底にはただ1つ帝国の防衛を根本から考察することがあった¹¹⁰⁾。

戦略的環境や時代の変化に応じて、帝国の政策や軍事力も変わらなければならないことは、インド政庁全体の認識でもあった¹¹¹⁾。インドの戦略的環境については、カーゾンが「インドの地政学的位置はより一層国際政治の最前

107) Summary of the administration of Lord Curzon of Kedleston, Viceroy and Governor-General of India in the Military Department, 1907, p.4.

108) French, D. and B. H. Reid, (2002) p.58.

109) Sir, Arther, G., (1920) ii, p.116.

110) *Ibid.*, p.128.

111) Summary of the administration of Lord Curzon of Kedleston, Viceroy and Governor-General of India in the Military Department, 1907, p.1.

線にインドを追いやっている。インドはますます大英帝国の戦略的国境になろうとしている。(中略)、環境は絶え間ない警戒と予防の義務を我々に課し、我々の力を高い効率性のなかに置き、防衛を確固としたものとし、政策を注意深く実行することを求めるのだ。」と語っている¹¹²⁾。

キッチナーは、1903 年 1 月から北西辺境を中心に国内の査察を行い、現状を把握することに努めた。旅行中も研究を重ね、彼は改革の構想を暖めた。部隊の配置、組織と時代遅れの訓練方法について考えを重ねた。¹¹³⁾

1903 年 11 月、総督参事会にキッチナーは広範囲にわたる改革プランを提出した。軍隊を機能的な戦闘組織とするために、第 1 に国内の治安維持を主任務から外した。治安維持に当たる部隊は最小限にとどめ、正規軍以外の義勇兵や警察の助けも借りて治安維持に当たる。第 2 に戦闘に即応できる単位と組織に部隊を再編成し、再配置すること。彼の計画にインド政庁側も同意し、カーゾン総督もこれ以上の計画はないであろうと判断した。1904 年 9 月 1 日に本国も認可し、キッチナーの計画は 10 月 28 日付けの軍令で制定された。¹¹⁴⁾

その結果、歩兵 9 個師団と騎兵 3 個旅団が平時に編成され、9 個師団は 2 つの集団、北部軍と南部軍に分けられることになった。しかし、そのためには、何よりも、部隊を機能的に動かし、戦争に備えることのできる組織と人材が必要であった。なかでも、キッチナーが重要視したのは軍総司令官に直属して頭脳となる司令部の組織と、その組織を運営し、また軍の根幹にかかわる教育などの業務を担うことのできる参謀将校 (Staff Officer) の存在であった。最大の問題は専門的能力を備えた人材の不足であり、本国キンバリー (Camberley) の参謀大学 (Staff College) から供給される、高等軍事教育を修めた将校は全体の一部しかいなかった。よって、キッチナーは、現地インドで問題を解決しようと、インドに参謀大学 (Indian Staff College) を設置することを決意した。¹¹⁵⁾

112) *Ibid.*, p.4.

113) Sir, Arther, (1920) ii, pp.128-132.

114) *Ibid.*, pp.132-137.

115) French, D., and B. H. Reid, (2002) pp.58-59.

しかし、1903 年 10 月にインド政庁からインド相に送付されたインド参謀大学設置を求める請願書に、本国は強硬に反対した¹¹⁶⁾。陸軍評議会 (Army Council) は帝国のあらゆる軍隊組織は単一であるべきと反対理由を述べた。これに対し、キッチナーは粘り強い交渉を重ねて、本国と同じ入学試験を行い、キンバリーの卒業生を教官とし、同じカリキュラムで運営することを条件に、インドに独自の参謀大学を開設することの同意を取り付けることに成功した。本国のメトロポリタンも、現地インド当局者も、帝國的視点を有していたことは同じでも、その色合いは違い、本国側の帝国の単一化を求める力は強かった。¹¹⁷⁾

インド参謀大学は 1905 年 6 月 1 日に仮の施設ながらデカン地方に開校した。24 名の将校が入校し、キンバリーと同じシステムで教育が行われた。1907 年 4 月にはクエッタ (Quetta)¹¹⁸⁾ に常設の施設としてインド参謀大学が開設され、インドにおける需要を満たすために能力ある参謀将校の育成が進められた。¹¹⁹⁾

人材の供給の目処がたったところで、キッチナーの思考は、参謀将校が担うべき業務を変え、その組織を改革することに向かった。すでに参謀大学開設以前に、キッチナーは参謀業務を 2 つのセクションに分けておいた。Art of War は、戦争の研究、教育と戦争準備を担当し、Routine は文字通り日々の軍政業務を担当した。これが、のちの参謀制度創設の前準備となるものであった。時期的には 1906 年からの動きになるが、そのとき総督はカーゾンからミントーに交替していた。¹²⁰⁾

116) かつて、1875 年にも、インド政庁は本国に対し、参謀大学の設立を要求したが却下されていた。主な理由は本国の至高性を侵す恐れがあることであった。結果、1876 年から毎年 6 名のインド軍将校が本国の参謀大学に受け入れられることになった。Ibid., p.59.

117) Ibid., pp.59-60.

118) アフガニスタン国境や北西辺境州と接するバルチスタン (Balchistan) の交通・軍事上の要衝で、1903 年の時点で、キッチナーはクエッタを参謀大学の地とすることを構想していた。Pollock, J., (2001) p.260.

119) French, D., and B. H. Reid, (2002) p.60.

120) Ibid., p.61.

カーゾンとの対立、キッチナー－カーゾン論争は、これまでも多く議論され、両者の伝記においても、インド時代の主要なエピソードであった。従来、両者の対立は主として 2 人のパーソナリティーに帰せられ、文民統制を巡る問題と受け取られてきた¹²¹⁾。異なるバックグラウンド¹²²⁾にもかかわらず、両者は同じ様な気質——プライドが高く、人から指揮されることを好まない——を持ち合わせていた。

けれども、対立の根本には、まずインド固有の軍制、組織体制があった。第 1 図のとおり、インド総督率いる総督参事会の下に、インド軍総司令官¹²³⁾と軍事委員 (Military Member)¹²⁴⁾が並存していた。この二元的管理下で、軍務局 (Military Department) を従える軍事委員は軍政事項一般を管轄していた。しかも、軍総司令官と異なり、軍事委員は参事会の常任委員で、総督に軍事問題について助言を行う軍事顧問のような立場にあった¹²⁵⁾。

キッチナーは軍事委員と軍務局を廃止し、軍総司令官の下に軍事組織を一元化することを要求した。これに対し、カーゾンは文民である副王が軍総司令官と相対するためには有能な軍事顧問が必要であり、それによって文民権力は軍に左右されず、文民権力の優越性が保たれるのだと主張した。カーゾンは、自らの権力と権威への挑戦と受け取った。¹²⁶⁾

対立は本国政府を巻き込んだ。両者はそろって辞任を示唆したため、本国政府は思い悩んだ結果、妥協案を選択した。軍総司令官は軍務局を所管し、総督に助言を行う唯一の存在とするが、一方で、純軍事的でない付随業務を担当する軍事補給委員 (Military Supply Member) を新たに参事会のメンバーと

121) たとえば、浜渦哲雄 (1999) でも、対立を個人的なものとして説明している。

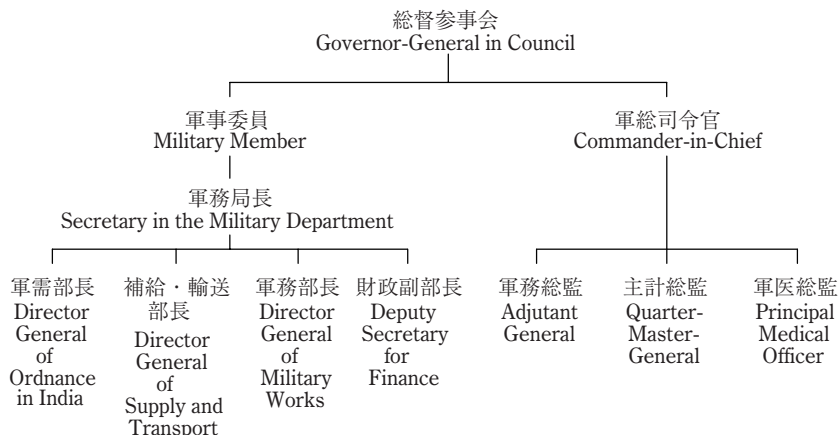
122) カーゾンはノルマン征服にまで遡る貴族出身で、典型的なエリートコースを歩んだ政治家。キッチナーは中流ジェントルマン階級出身の軍人。

123) 総司令官の下で、軍務総監が軍紀、訓練などを、主計総監 (Quartermaster-General) が作戦、インテリジェンス、動員、ロジスティクスを所管した。

124) 国防相、軍務部長官などの訳があるが定まっていない。確定にはより一層の統治機構に関する研究が必要であると思われるが、本稿では参事会の軍事担当常任委員と考えて、この訳とした。

125) Roberts, P. E., (1980) p.552.

126) *Ibid.*, p.553.



第1図 キッチナー改革以前のインドにおける軍の組織体制

出典：Record of Lord Kitchener's administration of the Army in India 1902-1909, 1909, p.3.

して新設する¹²⁷⁾。

妥協案はキッチナーの主張に近く、不完全ながら彼の勝利であった。この状況を東駐在武官は「印度陸軍全権ヲ掌握スルモノ」と評している¹²⁸⁾。軍事補給委員の人事についても、本国はキッチナーの側についた結果、カーゾンが辞任を申し出た。

しかし、それだけでは対立の実像は理解できない。本国政府は、対立の本質をつかめず、キッチナーの人気を恐れて、彼を支持し、結果、文民統制を侵してしまったのであろうか。

けれども、本国の首相バルフォア（Arthur James Balfour）は軍事に造詣が深く、知性と議会交渉に優れた練達の政治家であった¹²⁹⁾。何より、彼は1902年にロー

127) *Ibid.*, p.554.

128) 吉村道男（2004）30頁。続けて、軍政軍令の両方を掌握した場合、総督と軍総司令官の両方に相当の人物を得なければ、弊害は既存よりも遥かに数十倍大きいと述べている。

129) Mackay (1985) の副題は *Intellectual Statesman* である。バルフォア宣言の影響からか、ネガティブなイメージが強いが、世界大戦前後のイギリスをより深く洞察するためには欠かせない政治家であると思われる。

ズベリーらがキッチナーを陸軍大臣にすべきと唱えたときに反対した¹³⁰⁾。イギリスの伝統と相容れないばかりか、偉大な軍人に求められる素質と議会にあって政府を代表する大臣のそれとは違うと主張した。彼は明確に文民統制と議会主義における大臣の役割を理解していた¹³¹⁾。

さらに彼はボーア戦争で露呈したイギリスの軍事的欠陥を是正するための組織として 1902 年に帝国防衛委員会 (Committee of Imperial Defence, CID)¹³²⁾ を創設した。CID は、変化する戦略的環境のなかで、文民優位の効果的な防衛体制を確立することを目的とした「帝国内外の防衛の局面に関する勧告・諮問機関」であった¹³³⁾。同委員会の最重要課題は本国とインドの防衛問題であり、そのための陸海軍戦略を審議した¹³⁴⁾。

バルフォアは国制の理解とあわせて、帝国防衛のためには政治と軍事を統合し、国家戦略の見地から総体的に防衛問題を扱うことが必要だと強く認識している政治家であった。CID もそのための組織であり、文民が主導する委員会というシステムに軍人を取り込むことにより、軍事を統制しようとするものであった¹³⁵⁾。

よって、本国が、文民統制に対する危険性を看過していたとは思われず、その思惑は別にあったと考えるべきでないであろうか。1904 年 12 月 2 日付の文書で、インド相は軍政が軍総司令官と軍事委員に二分されている「二元管理 (dual control)」の状態に疑念を表明し、平時から戦時への移行が円滑になされないと警鐘を鳴らした¹³⁶⁾。

ここで、インド支配の特殊性を思い返してみるべきである。インド支配は

130) Crewe, R. O. A. Crewe-Milnes, Marquis of, (1931) p.580.

131) Mackay, (1985) p.121.

132) 日本では、村島滋, (1993)「日英同盟と日露戦争の間——イギリス「帝国防衛委員会」の動向を中心として (近現代政軍関係と国際政治経済) ——」『政治経済史学』第 320 号, 佐藤栄一編 (1979) 所収の坂井秀夫による研究がある。

133) 村島滋 (1993) 49-50 頁。

134) 同上論文, 52 頁。なかでもインドの比重は高く、第 31 回会議までの主要議題のうち本国防衛が 8 回、インド防衛は 18 回を占めていた。

135) 佐藤栄一編 (1979) 81 頁。

136) Record of Lord Kitchener's administration of the Army in India 1902-1909, 1909, p.1.

インド帝国内で完結せず、監督する文民のインド相が本国に厳然とあった。第1図の枠外に、上部機構が存在した。すなわち、インドの軍制改革がいかに行われようと、イギリスの国制と文民統制の原則は保持される。しかも、本国は参謀本部の創設などの改革を進める一方で、CIDというイギリス的な委員会システムによる効果的な帝国国防衛体制を構築していた。本国の改革にまで視野を広げて、帝国全体のレベルで問題をとらえることで、キッチナー-カーゾン論争の像は違う焦点を結ぶ。カーゾンが主張した、キッチナーによる総督権力の侵害は、本国にとって許容範囲であったといえよう。むしろ、本国にすれば、帝国の防衛はインドにかかっており、インドの軍事力の強化は至上命題であった。

よって、前途有望な総督を切り捨てても、インドの軍制改革は断行する必要があった。ただし、軍制改革を進めるためには、軍事の専門家のみならず、広い視野に立って、全体を調整する総督の存在も必要であった。論争の結末は、軍事問題を扱う場合の両者の存在の重要性も示している。

6 インド軍改革後期——改革の完成とインド参謀本部の成立——

本国統一党政府は、カーゾンの後任に、アンチテーゼ¹³⁷⁾ といっているミントーを選んだ。それでは、ミントーは帝国にとってどのような人材と認識され、総督に任命されたのであろうか。

1905年6月の *Cassell's Magazine* に新インド総督ミントーを紹介する記事が掲載された。そのなかで、ミントーは「軍事的資質と経験を有している」人物であり、それが「インドに良きものをもたらすことになるだろう」と予言をもって語られている。さらには、まだ、ミントーの施政がはじまっていないので言うことははばかれるとしながらも、ミントーがキッチナー-カーゾン論争に決着をつけるであろうことが暗示される書きぶりとなっているの

137) 浜渦哲雄(1999)では、あらゆる面で、前任のカーゾンとは対照的で、ヴィクトリア朝イギリス貴族のアマチュア精神を体現するような人物とされている。

である。しかも、興味深いことに、この記事の発行は 1905 年 6 月である。¹³⁸⁾

しかし、ティンカー (Hugh Tinker) 著の『総督』の記述から考察すると、インド相がキッチナーの側についたのを知らせたのが 1905 年 5 月 31 日付けの至急便で、その後カーゾンの辞任とミントーの就任がロンドンで公表されたのが 8 月 21 日であった。時系列の符号を考えると、明らかに、本国政府は交渉の過程で、カーゾンに見切りをつけ、最終行動の準備を進めていたように思われる。¹³⁹⁾

このように、彼は、軍事に造詣が深く、期待された人物であったが¹⁴⁰⁾、直後に本国で政権交代が起こったために、彼は自由党政府とともに仕事をしなければならなかった。

自由党政権でインド相に就任したモーレイ (John Morley) は「チャールズ一世の断頭台における死以来、イギリスにおけるゆずれない大原則は文民の権力が軍人の権力に超越する」との信念を抱いていた。彼が信念を貫く限り、キッチナーの改革を支持するという前政権の決定を覆すべきであったが、そうすることは総督と軍総司令官両者が辞任し、インドにおける改革が停止することを今や意味していた。したがって、新インド相は既成事実を毅然として受け入れ、無益な論争を継続するリスクを持つ問題に終止符を打った。¹⁴¹⁾

このことは、3つのことを意味していた。第 1 に、インドの軍制改革が帝国にとって遅延が許されない重大な問題であったということ。第 2 に、帝國的視野に立ったとき、保守党と自由党の政治的立場に相違は無かったということ。最後に、キッチナーの改革が、総督の支援だけでなく、本国の了解を得られたことにより、改革を強力に進めることが可能になったということであった。

改革を進めるにあたり、カーゾンと対照的なミントーはこの難しい時期の

138) Ellison, G., (1905) "Some Impressions of Minto," *Cassell's Magazine*, June, pp.68-75.

139) Tinker, H., (1997) *Viceroy: Curzon to Mountbatten*, Karachi: Oxford University Press, p.37.

140) 若いころにロバーツの副官やランズダウンの私設軍事秘書官も務めている。

141) Roberts, (1980) p.560.

総督として適任であった。彼は、統一党政府の任命にもかかわらず、鋭敏な感覚を持てる貴族政治家で、イギリス式高等教育の進展が時々刻々とのようにインド人の思想に大きな変化をもたらしつつあるかを意識していた¹⁴²⁾。

カーゾンとの論争のさなかの1905年1月1日、キッチナーは自らのメモに改革の意義を記している。「インドの軍事問題が単にインド帝国の自衛を考えるだけでよいのであれば、私が指摘した二元管理などの問題に対処する必要はない。けれども、(中略)、ことは帝国の問題であって、単にインドだけの問題ではない。(中略)だからこそ、インドにおける軍制とともに軍総司令官にすべてを直結させる軍のあり方が議論されなければならない。必要ならば、変革がなされなければならない。既存の軍制には欠陥があり、非効率であること、帝国の総力をあげて戦わなければならないであろう大戦争には耐ええないものであることを指摘することが私の避けられない義務である。」¹⁴³⁾

キッチナーは、軍総司令官がトップであるにもかかわらず、軍隊の装備、生活、活動にかかわる業務が彼の管轄になく、軍事委員の下にある事実を重く見た。軍総司令官が輸送と補給に責任を持っていないことは、軍の機能に重大な影響を与え、国を危険にさらす。平時に組織化されていなければ、戦時に対処できはしない。¹⁴⁴⁾

よって、カーゾンとの論争を経て、論争がミントーの総督就任という形で決着すると、自らの改革構想を推進し、最終的にインドに参謀制度(system of the General Staff)を築き上げることをキッチナーは目指した。

第1段階として、1906年初め、キッチナーは、インド全軍の頭脳(thinking staff)となる参謀長局(Division of the Chief of Staff)を新設し、その組織の長として参謀長を任命した。参謀長局は、軍にかかわるほとんどすべての事項——戦争準備、インテリジェンス、動員、訓練、教育、作戦計画の立案、参謀教育など——を管轄した。参謀長の下には、軍事作戦部と訓練・参謀業務部の

142) 満鐵東亞經濟調査局編、(1942)『印度統治機構の史的概観』満鐵東亞經濟調査局、71頁。

143) Record of Lord Kitchener's administration of the Army in India 1902-1909, 1909, p.2.

144) *Ibid.*, pp.5-6.

2つの部が置かれた。前者にはかつて主計総監が管轄していたインテリジェンスと動員を担当するそれぞれの課と新しい戦略課の3つの課があった。後者は、将校教育、軍隊の演習や参謀大学の運営などを担当した。1906年3月、念願かなって、軍務局が廃止されると、その業務の大部分はキッチナーが準備しておいた参謀長局に受け継がれた¹⁴⁵⁾。

さらに、本国で参謀本部設置の動きが進められるのにあわせて、その機運を感じ取ったキッチナーはインドにも同様の組織を作るべく動いた。キッチナーは参謀本部を、より広い視野から軍事問題を考察し、平時には軍の訓練を担う参謀将校で構成される組織であり、戦時には直接作戦を指揮するものと定義した¹⁴⁶⁾。

また、参謀本部は、平時に遂行される義務も重要ではあるけれども、主としてかつ本質的に、戦争(戦時)の組織であると彼は指摘した。だからこそ、戦争に備えて平時からより高レベルな訓練を行い、その訓練を参謀本部が担うことが重要であった。そのために、参謀本部の平時の任務は、戦争の技術(Art of War)の研究と、自らと軍隊を戦争に要求される義務のために備えることであった。¹⁴⁷⁾

同時に、参謀本部の組織と機能は、インドのためばかりでなく、広く帝国全体のために設けられるものであった。しかし、その目的を原則そのままにインドの実情に適合させるには、インド支配の特殊性をはじめとする複雑な問題があった。よって、インドにおける参謀本部の形成は本国と交渉と妥協のなかで進められていった。¹⁴⁸⁾

キッチナーはすでに1905年の論争のさなかに、参謀本部の設置とそれを含む軍組織の改革の構想を明確に持っていた。1905年1月1日付けのインド相宛ての文書では、軍総司令官の下には6名の高級幹部を配し、それぞれ

145) French, D., and B. H. Reid, (2002) pp.61-62.

146) Record of Lord Kitchener's administration of the Army in India 1902-1909, 1909, p.10.

147) Explanatory Note by the Chief of the Staff, pp.8-9.

148) *Ibid.*, p.1.

が所管する業務に参謀将校を従事させることを考えていた。6名は、参謀長（Chief of the General Staff）、軍務総監、主計総監、軍需部長（Director-General of Ordnance）、財務部長（Financial Secretary）、政務秘書官（Secretary to Government）で、軍総司令官を議長とする戦争局（War Department）を構成する。主に軍務総監、主計総監、軍需部長の3名が、軍事委員が所管していた事項も含めて軍政に当たるものと考えていた。¹⁴⁹⁾

しかし、論争が妥協案という形で決着したことで、軍事委員が廃止されたものの、輸送や補給を担当する軍事補給委員が新しく設けられた。改めて、軍事補給局（Department of Military Supply）と軍総司令官が所管する陸軍局（Army Department）¹⁵⁰⁾ が並び立つことになった¹⁵¹⁾。そのため、キッチナーの構想は一部修正を迫られ、改革は段階を踏んで実施されていくことになった。

キッチナーの改革構想の根幹である参謀本部（General Staff in India）の設置要求は、1907年8月3日付の外交文書によりインド相に宛てて送られた。軍総司令官の下に参謀本部を設置すること、各部隊（師団、独立旅団）に参謀を配属すること、そのような任務に従事する参謀の任期や待遇などの細かい事項を含め、インド軍令（Indian Army Order）の草案にまとめられて提出された。これに対し、本国は長い時間をかけて協議し、約半年後の1908年3月20日付の文書でインド相は返事を送った。大体において同意していたが、参謀本部員の任期の長さや待遇の2点について本国は再考を促した。人事制度に関するインド政庁の要求は、本国の参謀本部の制度と異なるもので、実現されれば、帝国のなかに基準の異なる制度を認めてしまうことになった。ここでも、インド参謀大学の設置要求時と同じように、現地インド政庁は現地の実情にあった制度を求め、本国政府は帝国が単一であるべきことを重視した。¹⁵²⁾

人事制度の2点についてインド側は同意したものの、1909年4月本国はさ

149) Record of Lord Kitchener's Administration, pp.10-12.

150) 陸軍局は参謀長、軍務総監、主計総監、軍医総監、軍事秘書官（Military Secretary）で構成され、同時に彼らは軍総司令部の幹部でもあった。

151) *Ibid.*, pp.58-60.

152) Explanatory Note by the Chief of the Staff, p.2.

らなる譲歩と再考を求めた。折から、本国では帝国参謀本部 (Imperial General Staff) が形成されつつあり、より一層の「帝国は一体であり、1つの頭脳の下で機能するべき」との大原則の徹底を軍事面で迫った。インドをはじめ、南アフリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどの帝国の各地から集められる部隊は帝国の地方や帝国全体のためであり、緊密な連携の下で任務を遂行しなければならない。そのためには、同じ体制で組織され、訓練されなければならない。つきつめれば、本国は、インド参謀本部は帝国参謀本部のインドにおける地方出先機関であることを求めた。¹⁵³⁾

当然ながら、本国の要求はインドの強い反対を呼んだ。キッチナーと総督参事会も、帝国参謀本部が帝国の多様な軍事力を連合させる上で重要な機能を果たすことには同意したものの、インド軍を現地インド政庁ではなく本国の帝国参謀本部に従属させるような状況を生むことに異議を唱えた。よって、1909年6月10日付の文書で、インド政庁は、帝国参謀本部の計画に重大な懸念を表明し、言わば条件付で、本国の要請にしたがってインド参謀本部を創設することに同意した¹⁵⁴⁾。インド側も、特殊で多様な要素からなる帝国をまとめるためにはある程度の同一性・均一性が必要であることは受け入れた。

この事実は、今後の戦争が、帝国総がかりの戦争となり、帝国の総力を結集し、帝国各地から軍隊を結集させる必要があることを帝国と関係者が認識していたことを示している。多様な要素からなる帝国の軍隊を烏合の衆とせず、効率的で一体となった戦力にするためには、それらの要素が単一の原則の下に統合されなければならなかった。とくに、軍隊を動かすにあたっての指揮と参謀制度は単一原則のなかでも譲れないものであった。¹⁵⁵⁾

インド政庁が同意したことを受けて、1909年8月1日付の外交文書でインド相はインド参謀本部の創設計画に認可を与えた。それは、インド参謀本部が、帝国参謀本部と同様に本国の定めた方針にしたがって形成されることを

153) French, D., and B. H. Reid, (2002) pp.64-65.

154) Explanatory Note by the Chief of the Staff, p.3.

155) *Ibid.*, p.4.

意味した。ただし、同文書において、インド相は、インド政庁が帝国参謀本部に対して抱く懸念を払拭することに努めた。曰く、本国陸軍省も帝国の一般原則をインドの特殊な状況に適応させることにに関して十分理解していること、インド参謀本部と帝国参謀本部や現地インド（軍総司令官とインド政庁）との関係は限界や範囲などを明確にさせること、帝国参謀本部の地方出先機関となるのはインド参謀本部のみであること——インド軍や軍総司令官はそうではないこと——を説明した。

こうして、紆余曲折と長い議論¹⁵⁶⁾を経て、1910年3月10日のインド特別軍令でインド参謀本部の創設が発表された。これにより、キッチナーによる軍制改革は完成を迎えたが、当のキッチナーはすでにインドにいなかった。けれども、インド参謀本部の創設は、これまでの改革——インド軍の再編成、組織改革、インド参謀大学の設置——の土台の上に築かれたものであり、組織と人材を有効に機能させる一連の改革の集大成であった。そして、それは、イギリスのインド支配と帝国全体を巡る動きのなかで達成された改革であった。

7 お わ り に

以上、本稿では、帝国主義時代に行われた、インド軍総司令官キッチナーによる軍制改革を直接の対象として考察を行った。それを通じて、帝国というイギリス国家の支配の諸相を垣間見ることも試みた。インド軍とは明らかに帝国主義的な存在であり、植民地インドの富によって生み出されたものでありながら、インド自身のためではなく、帝国のために使われる資産であった。インド軍の起源から見れば、帝国支配の手段であったものが、帝国主義時代にあつては、それ自体が目的化したともとらえられる。

だからこそ、キッチナーによる軍制改革も、帝国にとって必要なものであり、総督の交替劇も巻き込みつつ完遂されねばならなかった。それは、晩餐会の

156) 軍事補給委員の廃止要求も参謀本部設置要求と平行して行われていた。こちらも、1907年3月19日付で問題を提起してから、1909年1月22日付でインド相に認められるまでに約2年を費やした。Record of Lord Kitchener's Administration, pp.71-74.

祝辞に見られるように、改革関係者たちの自負であり、インドを支配する自らの存在意義にも通じる事業であったのである。

実際、改革の成果に応えるように、世界大戦にインド軍は大規模に投入され、ヨーロッパの西部戦線や中東のメソポタミア戦線で活躍した。最終的に、インドは非戦闘員を含め 1,440,437 人を動員し、そのうちの約 138 万人余りが海外に派遣された¹⁵⁷⁾。この数字はカナダ約 62 万人、オーストラリア約 41 万人と比べるとはるかに大きく、本国以外のドミニオン諸国のなかで最大の貢献をした。それは本国の動員数約 670 万人の 21% に相当し、帝国全体の総動員数約 953 万人中の 15% を占めるものであった¹⁵⁸⁾。

単に数字の上だけではなく、西部戦線におけるインド軍の活躍は、イギリスが大規模な志願兵軍隊を訓練し、戦場に投入するまでの貴重な時間を稼ぎ、その構想を練ったキッチナーの戦略を支えたのであった¹⁵⁹⁾。インドは、キッチナーが「帝国の消防隊 (imperial fire brigade)」と称した名前のとおり、帝国の危機に際し、大きな貢献をした¹⁶⁰⁾。だからこそ、インド民族史の観点でも、世界大戦は大きな転換点となったのである。

支配の観点から見れば、帝国はインドに総督と軍司令官の双方に最良の人材を送り込んだ。彼らは帝国の各地で豊富な知識と経験を積んだ人材であった。それにより、内政的に安定した時代のあと、覚醒が必要な帝国主義期に、帝国にとってもっとも重要な植民地インドで大規模な軍制改革の実施を可能にした。

しかも、軍制改革は当時最新の軍事制度を導入することにより、インド軍を近代的な軍隊へと転換させた。組織面では、本国と並ぶ参謀本部システムや、

157) 秋田茂 (2003) 90 頁。

158) 木畑洋一, (1987)『支配の代償——英帝国の崩壊と「帝国意識」——』東京大学出版会, 50 頁。

159) インド軍の西部戦線での活躍は、Jack, G. M., (2006) “The Indian Army on the Western Front, 1914-1915: A Portrait of Collaboration” *War in History*, vol.13, No.3, pp.329-362, の研究が詳しいが、キッチナーと関連した考察はみられない。

160) キッチナーは、インド防衛を懸念するダフの反対を押し切り、インド軍を西部戦線に大規模に投入した。Cassar, (2004) pp.43-44.

陸軍管理の一元化が達成された（第2図参照）。インド支配と密接に関係するインド軍を介して、植民地のなかに、近代的制度が持ち込まれ、現地支配のなかに組み込まれたのである。植民地＝遅れた存在と簡単に定義することはできないし、だからこそ官僚組織とともに、独立後のインドは軍隊機構もすべて受け継いだのであろう¹⁶¹⁾。

また、支配者である彼らは、明日に責任のある統治者として、自負をもって、新しい帝國的組織としての軍隊の第一歩をインドに築こうとしたのではないであろうか。支配の論理構造の分析には、もっと彼らの言説を詳細に見ていく必要があるが、彼らは、インドにおいてこそ、それができ、実際になすことができたと考えていた。ただし、あくまでも、イギリス人の優秀な指導者層の下での、帝国の連帯の強化であったことは言うまでもないが、自らが指揮し、現地インド人兵士からなる軍隊に信頼を置いていたことも事実であるように思われるのである。

以上、本稿は、支配の論理構造・組織構造・人材活用を論点としながらキッチナーとその軍制改革を考察してきたが、まだまだ概説的な説明にとどまり、仮説や問題提起のままで終わってしまったものを多く抱えている。個別的にはインド支配機構の解明、総督の役割、本国と現地間の交渉プロセスなど、より実証的な研究を進めなければ、インド軍制改革を含め支配の全容は見えてこない。

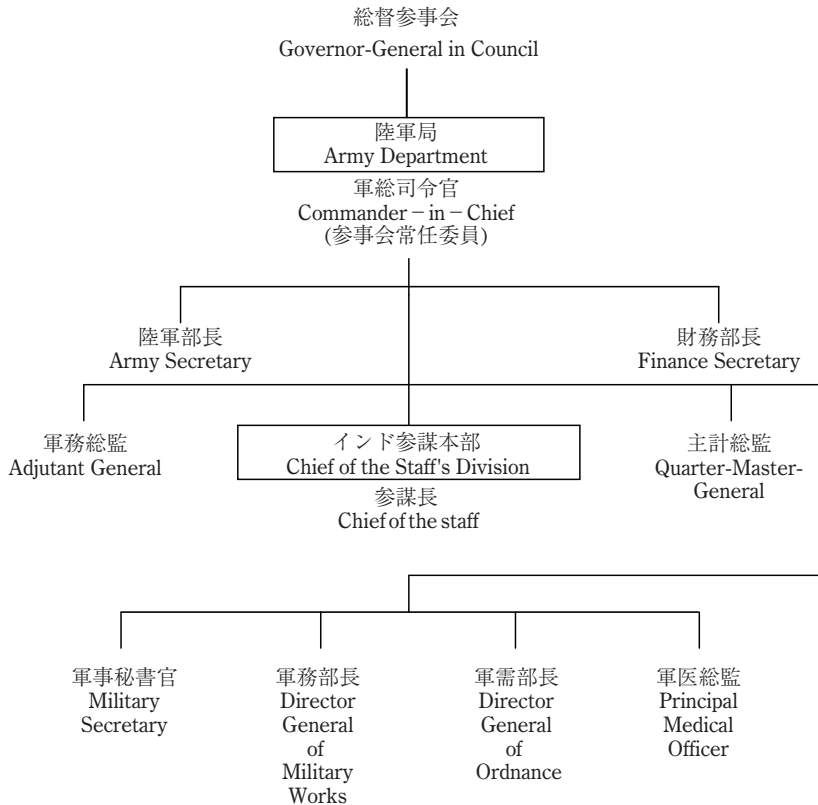
ミントー総督期は、高揚する民族運動に対応しながら政治改革を進めなければならない時代でもあった。ミントーはインド人に対して硬軟両政策を巧みに使い分けながら¹⁶²⁾、インド人の登用と立法機構の民主化を目的としたモーレイ・ミントー改革を断行した¹⁶³⁾。宥和と分割統治の典型¹⁶⁴⁾や世界大

161) サルカール、スミット（1993）『新しい近代インドの歴史Ⅰ——下からの歴史の試み——』研文出版、6頁。また、浜渦氏も、躍進する21世紀インド経済の基盤をイギリスの統治機構がつくったという側面も忘れてはならないと指摘する。浜渦（2009）16頁。

162) 浜渦哲雄（1999）161頁。

163) 満鐵東亞經濟調査局編、（1942）『印度統治機構の史的概観』満鐵東亞經濟調査局、69-71頁。

164) サルカール、スミット（1993）189-192頁。



第 2 図 キッチナー改革後のインドにおける軍の組織体制

出典：Record of Lord Kitchener's administration of the Army in India 1902-1909, 1909, Appendix
 “Organisation of the Staff at Army Head Quarters,” p.53 から作成

戦後の歴史からみると「遅すぎた改革」¹⁶⁵⁾ という評もあるが、軍制改革と同様に時代の要請に適應した必要な改革であったととらえたい。電信や郵便などの内政面の改革も進められた。キッチナーは、晩餐会で、郵便・電信局 (Postal and Telegraph Departments) や鉄道部門のスタッフにも賛辞を送っているが¹⁶⁶⁾,

165) 北原靖明 (2004) 219-221 頁。

166) Speeches by Earl of Minto, Viceroy and Governor General of India, Superintendent Government Printing, India, 1910, p.299.

ミントー総督期の総合的な解明が必要である。

また、キッチナー自身が「幸運なことに、私の前任者達が、その上になって構築すべきすばらしい土台を残してくれていた。また、私のインド赴任と時を同じくして、豊かで、急速に増大する歳入があった。改革のために必要な資金に活用できた。」と語っているとおり¹⁶⁷⁾、インド植民地財政との関係はとりわけ重要であろう。

今後、考察すべき課題を多く残すところではあるが、明らかなことは、帝国主義時代という、国際的環境の変化、経済的権力の強化・再編成が求められる時代において、領域を拡大させた帝国イギリスは、帝国主義的發展に応じて支配システムを変化させることに成功し、最大の帝国主義戦争である第一次世界大戦を迎えることになったのである。それが、キッチナーにより行われた英領インドにおける軍制改革の歴史的意義であった。

【参考文献】

The Indian Papers of the 4th Earl of Minto from the National Library of Scotland.

The Indian papers of the 4th Earl of Minto: introduction by Dr. William Gould.

MS. 12600: Summary of the administration of Lord Curzon of Kedleston, Viceroy and Governor—General of India in the Military Department, 1907.

MS.12601: Record of Lord Kitchener's administration of the Army in India 1902-1909, 1909.

MS.12676: Army Department Summary of the principal events and measures during the viceroyalty of the 4th Earl of Minto from November 1905 to November 1910, 1910.

MS.12677 (vii): Explanatory Note by the Chief of the Staff, 1910.

MS.12677 (vii): India Army Orders Nos. 202 and 203, dated 4th April 1910.

MS.12679 (vii): East India (Army and Population) Return to an Address of the Honourable The House of Commons, dated 4 May 1908.

167) *Ibid.*, pp.297-298.

MS.12686: Speeches by Earl of Minto, Viceroy and Governor General of India, Superintendent Government Printing, India, 1910.

MS.12800: 1909 [Cd.4956] Memorandum on Some of the Results of Indian Administration during the Past Fifty Years of British Rule in India.

MS.12802: Copies of magazine and newspaper articles written by and concerning the 4th Earl of Minto, 1880-1914.

Ellison, G., June 1905, "Some Impressions of Minto" Cassel's Magazine, pp.68-75.

Sir Arundel, February 1909, "The New Reforms in India" The National Review, pp.1024-1037.

BPP

Hansard, BPP: The War, H. L. Deb. 25 August 1914, vol.17, cc.501-504.

Hansard, BPP: The War, H. L. Deb. 17 September 1914, vol.17, cc.735-740.

Sir, Arther, G., (1920) *Life of Lord Kitchener*, i , ii , iii , The Macmillan Company.

Barnett, C., (1970) *Britain and Her Army 1509-1970: A Military, Political, and Social Survey*, New York: W. Morrow.

Beckett, I., and J. Gooch, (1981) *Politicians and Defence: Studies in the Formulation of British Defence Policy 1845-1970*, Manchester: Manchester University Press.

Beuttner, E., (2005) *Empire Families Britons and Late Imperial India*, Oxford University Press.

Bond, B., (1961) "The Late Victorian Army," *History Today*, vol.XI, pp.616-624.

Cassar, G., H., (2004) *Kitchener's War: British Strategy from 1914 to 1916*, Washington: Brassey's Inc.

Crewe, R. O. A. Crewe-Milnes, Marquis of, (1931) *Lord Rosebery*, London: Murray.

Duckers, P., (2003) *The British-Indian Army 1860-1914*, Shire Publications Ltd.

French, D., and B. H. Reid, (2002) *The British General Staff : Reform and Innovation, c.1890-1939*, London: Frank Cass.

Gooch, J., (1974) *The Plans of War: The General Staff and British Military Strategy c.1900-1916*, London: Routledge & Kegan Paul.

Jack, G. M., (2006) "The Indian Army on the Western Front, 1914-1915: A Portrait of

- Collaboration,” *War in History*, vol.13, No.3, pp.329-362.
- Mackay, R. F., (1985) *Balfour: Intellectual Statesman*, Oxford: Oxford University Press.
- Matthew, H. C. G., and Brian Harrison, (2004) *Oxford Dictionary of National Biography: In Association with the British Academy: from the Earliest Times to the Year 2000*, Oxford: Oxford University Press.
- Mehra, P., (1985) *A Dictionary of Modern Indian History 1707-1947*, Delhi: Oxford University Press.
- Neilson, K., (1980) “Kitchener: A Reputation Refurbished?” *Canadian Journal of History*, vol.15, pp.207-227.
- Neilson, K., (1987) “Total War: Total History,” *Military Affairs*, vol.51, No.1, pp.17-21.
- Pollock, J., (2001) *Kitchener: Architect of Victory, Artisan of Peace*, New York: Carroll & Grafe Publishers, Inc.
- Roberts, P.E., (1980) *History of British India: Under the Company and the Crown*, Delhi: Oxford University Press.
- Spires, E., (1994) “The Late Victory of the British Army,” *The Oxford Illustrated History of the British Army*, pp.189-214.
- Tinker, H., (1997) *Viceroy: Curzon to Mountbatten*, Karachi: Oxford University Press.
- Urban, M., (2006) *Generals: Ten British Commanders who Shaped the World*, London: Faber and Faber.
- Young, P., and J. P. Lawford (ed), (1970) *History of the British Army*, London: Arthur Barker Limited.
- 秋田茂, (1983) 「『自由貿易帝国主義時代』のインド支配——チャールズ・ウッド卿のインド統治政策をめぐって——」『史学研究』第 161 号, 47-68 頁.
- 秋田茂, (1984) 「1870 年代半ばのインド統治政策——インド相ソールズベリーとインド総督ノースブルックの政治的対立を中心として」『史学研究』第 165 号, 61-82 頁.
- 秋田茂, (2000) 「帝国と軍隊——イギリスの植民地支配とインド軍——」濱下武志・川北稔編『地域の世界史 11 支配の世界史』山川出版社.
- 秋田茂, (2003) 『イギリス帝国とアジア国際秩序——ヘゲモニー国家から帝國的な構造権力へ——』名古屋大学出版会.

- 秋田茂編, (2004)『パクス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ書房.
- ベイリー, C. A. 編, (1994)『イギリス帝国歴史地図』東京書籍.
- ボンド, プライアン, (2006)『イギリスと第一次世界大戦——歴史論争をめぐる考察——』芙蓉書房.
- イングリッシュ, R., M. ケニー, (2008)『経済衰退の歴史学——イギリス衰退論争の諸相——』ミネルヴァ書房.
- フリードバーグ, アーロン, (1989)『繁栄の限界——1895～1905年の大英帝国——』コーリウ生活文化研究室.
- ギャラハー, J., R. ロビンソン, (1983)「自由貿易帝国主義」『帝国主義と植民地主義』(ジョージ・ネーデル, ペリー・カーティス編)御茶の水書房, 129-166 頁.
- 浜渦哲雄, (1991)『英国紳士の植民地統治』中央公論社.
- 浜渦哲雄, (1999)『大英帝国インド総督列伝』中央公論新社.
- 浜渦哲雄, (2009)『東インド会社——軍隊・官僚・総督——』中央公論新社.
- 秦郁彦編, (2001)『世界諸国の制度・組織・人事: 1840-2000』東京大学出版会.
- ホブスン, J. A., (1952)『帝国主義論』上, 下, 岩波書店.
- 本田毅彦, (2001)『インド植民地官僚——大英帝国の超エリートたち——』講談社.
- 細川道久, (1993)「イギリス帝国政策とカナダの対応——カナダのボーア戦争参加をめぐって——」『西洋史学』第 170 号, 70-86 頁.
- 北條雅人, (1999)「陸軍委員会の成立——第一次イングランド内乱における議会の軍政改革——」『史学』第 68 巻第 3・4 号, 365-389 頁.
- ハワード, マイケル, (2010)『改訂版 ヨーロッパ史における戦争』中央公論新社.
- 今田秀作, (2002)「19 世紀イギリス帝国に関する一考察——経済グローバリゼーションとの関連において——」『経済理論』第 309 号, 99-129 頁.
- 井野瀬久美恵, (2000)「彙報 アングロ・ボーア戦争勃発 100 周年記念国際会議に参加して」『歴史学研究』第 741 号, 57-60 頁.
- 片岡徹也編, (2009)『軍事の辞典』東京堂出版.
- 片岡徹也, (2002)「近代戦に乗り遅れた軍隊——20 世紀初頭イギリス陸軍から何を学ぶか——」『陸戦研究』第 50 号, 3-26 頁.
- 川村朋貴, (1999)「世紀転換期における植民地総督とイギリス帝国」西川達夫・渡辺公

- 三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房, 387-410 頁.
- 川北稔, (2007)「帝国主義史から帝国史へ——日本におけるイギリス帝国史研究の変遷——」木畑洋一編『現代世界とイギリス帝国』ミネルヴァ書房, 355-379 頁.
- ケイン, P. J., A.G. ポプキンズ, (1997)『ジェントルマン資本主義の帝国 I ——創生と膨張 1688-1914——』名古屋大学出版会.
- 木畑洋一, (1987)『支配の代償——英帝国の崩壊と「帝国意識」——』東京大学出版会.
- 木村和男編, (2004)『世紀転換期のイギリス帝国』ミネルヴァ書房.
- 北原靖明, (2004)『インドから見た大英帝国——キプリングを手がかりに——』昭和堂.
- 木谷勤, (1997)『帝国主義と世界の一体化』山川出版社.
- 北岡元, (2006)『インテリジェンスの歴史』慶応義塾大学出版会.
- 栗田禎子, (2001)『近代スーダンにおける体制変動と民族形成』大月書店.
- ロイド・ジョージ, ディヴィッド, (1940)『世界大戦回顧録』1, 2, 改造社.
- 前川一郎, (2005)「学界展望 イギリス帝国史研究の挑戦——近代帝国とグローバル・ヒストリー——」『西洋史学』第 220 号, 43-58 頁.
- マグドフ, H., (1981)『帝国主義——植民地期から現在まで——』大月書店.
- 満鐵東亞經濟調査局編, (1942)『印度統治機構の史的概観』満鐵東亞經濟調査局.
- 見市雅俊, (1984)「アスキスと第一次世界大戦 (1) ——そのヴェネチア・スタンリーへの恋文を中心に——」『経済理論』第 197 号, 21-51 頁.
- 水谷智, (2009)「(比較する主体)としての植民地帝国——越境する英領インド教育政策批判と東郷實——」『社会科学』第 85 号, 1-29 頁.
- モリス, ジャン, (2006)『パクス・ブリタニカ——大英帝国最盛期の群像——』上, 下, 講談社.
- 宗方比佐子編, (2002)『キャリア発達の心理学』川島書店.
- 村岡健次, (1996)「イギリス陸軍士官の教育」『甲南大学紀要 文学編』第 102 号, 1-24 頁.
- 村島滋, (1993)「日英同盟と日露戦争の間——イギリス「国防衛委員会」の動向を中心として(近現代政軍関係と国際政治経済)——」『政治経済史学』第 320 号, 49-62 頁.
- 中村好寿, (1982)「イギリス陸軍におけるプロフェッショナルリズムの形成過程」『軍事史学』第 18 巻第 3 号, 2-16 頁.
- 中西輝政, (2004)『大英帝国衰亡史』PHP 研究所.

- 根無喜一, (1990)「エドワード時代のイギリス騎兵——アングルシイ侯爵の研究を中心に——」『人文論究』第 40 巻第 1 号, 16-32 頁.
- 根無喜一, (1992)「カードウェル改革と英国陸軍情報部の成立」『人文論究』第 42 巻第 1 号, 145-158 頁.
- 根無喜一, (1995)「E・スパイアーズ論文に見る 1880-90 年代の英国陸軍改革」『人文論究』第 45 巻第 1 号, 45-59 頁.
- 根無喜一, (1996)「情報部から参謀本部へ——南アフリカ戦争後の英国陸軍改革を中心に (1) ——」『人文論究』第 46 巻第 1 号, 76-87 頁.
- 根無喜一, (1998)「ボックス・ブリタニカの時代とイギリス陸軍 1815-65 年」『政治経済史学』第 388 号, 1-30 頁.
- 小此木真三郎, (1978)「イギリス帝国主義の軍事問題 (一八九九〜一九一四)」『日本福祉大学研究紀要』第 35 号, 1-25 頁.
- 小此木真三郎, (1979)「イギリス帝国主義の軍事問題 (一八九九〜一九一四) ——2——」『日本福祉大学研究紀要』第 41 号, 89-111 頁.
- 大久保桂子, (1997)「軍事史の過去と現在」『国学院雑誌』第 98 巻第 10 号, 30-44 頁.
- 大久保桂子, (1997)「ヨーロッパ「軍事革命」論の射程」『思想』第 881 号, 151-171 頁.
- ブレーヴェ, ラルフ, (2010)『19 世紀ドイツの軍隊・国家・社会』創元社.
- 阪口修平・丸畑宏太編, (2009)『軍隊』ミネルヴァ書房.
- 阪口修平, (2001)「近世ドイツ軍事史研究の現況」『史學雑誌』第 110 巻第 6 号, 84-103 頁.
- サルカール, スミット, (1993)『新しい近代インドの歴史 I ——下からの歴史の試み——』研文出版.
- 佐藤栄一編, (1979)『政治と軍事——その比較的研究——』日本国際問題研究所.
- センメル, バーナード, (1982)『社会帝国主義史』みすず書房.
- 菅原篤, (1993)「19 世紀末イギリス帝国政策省察」『立正大学人文科学研究所年報』第 30 号, 25-16 頁.
- 竹内幸雄, (2004)「研究動向 ホブスン『帝国主義』100 年と現代」『歴史学研究』第 792 号, 33-41 頁.
- 竹内幸雄, (2009)「自由主義と帝国の関係史——ゴブデン, ミル, そしてホブスン」『アジア・アフリカ研究』第 49 巻第 2 号, 2-20 頁.

辻本諭, (2005) 「名誉革命研究の新しい視角——イングランド陸軍に注目して——」『史
學雑誌』第 116 巻第 6 号, 87-108 頁.

チャンドラ, ビパン (2001) 『近代インドの歴史』山川出版社.

渡邊吉人, (2007) 「第一次世界大戦におけるアスキスの戦争指揮に関する一考察」『政
治経済史学』第 493 号, 33-52 頁.

山本崇人, (1994) 「1850 年代英国の陸軍改革——陸軍省の成立を中心に——」『関学西
洋史論集』第 19 号, 15-25 頁.

山室信一, (2003) 「「国民帝国」論の射程」山本有造編『帝国の研究——原理・類型・
関係——』名古屋大学出版会, 87-128 頁.

矢内原忠雄, (1937) 『帝国主義下の印度』大同書院.

吉村道男, (2004) 「史料紹介日露戦争期における英領インド駐在陸軍武官報告」『外交
史料館報』第 18 号, 25-37 頁.

(わだ まさき・同志社大学経済学研究科後期課程)

The Doshisha University Economic Review Vol.62 No.4

Abstract

Masaki WADA, *Lord Kitchener and the Reform of the Army in India, 1902–1909*

Lord Kitchener was one of the most famous national heroes during British Empire's era of imperialism. Kitchener's long experience of being "colonial officer" abroad gave him a much wider frame of reference. As an administrator, soldier, or reformer, in Egypt, Sudan, and South Africa, he approached his tasks in a unique fashion. After the Bore war, in particular, as the Commander-in-Chief in India, he proposed to reorganize the Army in India in order to answer the larger needs of the Empire. Moreover, he improved the Indian staff system to increase the efficiency of the army. The then Viceroy of India, Lord Minto, supported Kitchener's reforms. As a result of Kitchener–Minto Reform, the Indian army became a more efficient unit in the British Army, serving the Empire to the extent that it did during the Great War.